

琉球政府立博物館

館報

NO. 2



1969年

目 次

沿 革	1
博物館案内図	2
博物館機構及び職員構成	3
博物館予算の推移及び所蔵資料現在高	4
資料構入点数の推移及び当館所蔵の指定文化財	5
施設使用状況	6
月別消費電力量及び水道量	8
入館者数	9
主なる来館者	10
主なる新収蔵品写真	11
新収蔵資料	13
新収蔵図書	15
鄭元偉扁額「徳高」の受入れについて	17
博物館主催行事について	18
1. 当館所蔵書跡展	
2. 玉陵写真展	
3. 当館所蔵古絵画展	
4. 勝連城発掘展	
5. 写真展「沖縄戦とその直後の生活」	
職員の活動状況	23
博物館及び職員の出版物	23

研 究 録

江戸時代琉球使節の音楽と舞踊について	外 間 正 幸	25
琉球の唐獅子雌雄考	大 城 精 徳	31
知花の祭祀とその組織	上 江 洲 均	37
八重山小浜島泊遺跡採集石器について	玉 城 盛 勝	45

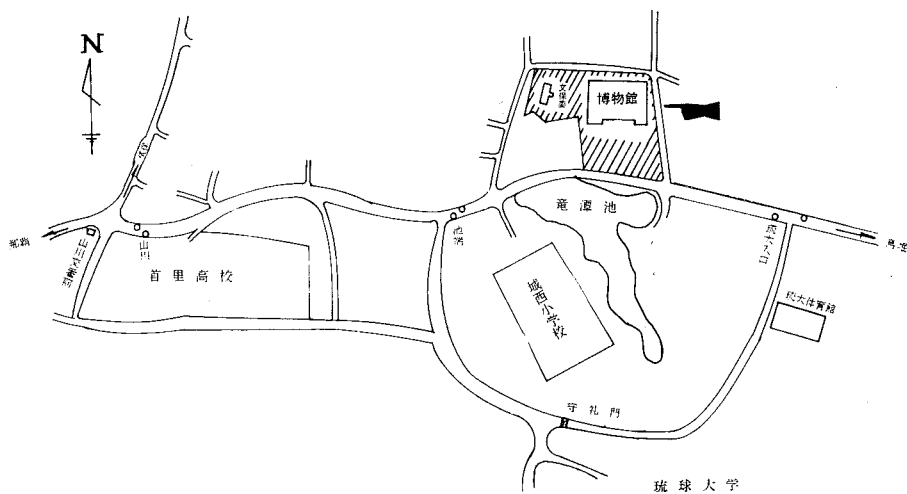
※ 表紙写真：琉球伝統玩具「チンチン馬グワー」

沿 革

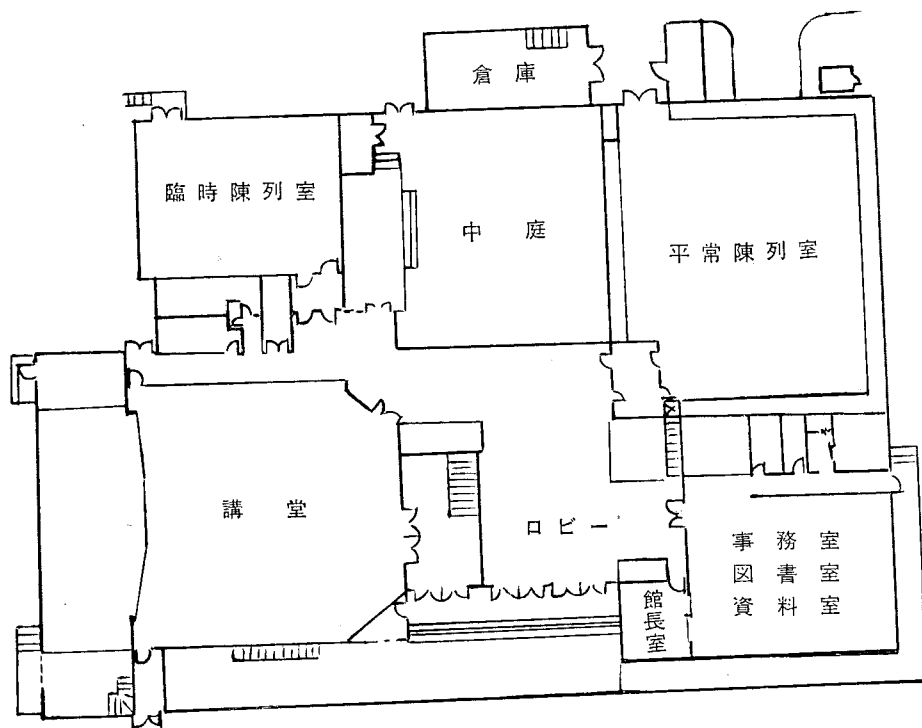
(自 1968.1～至 1969.2)

- 1968年1月26日 琉球政府教育センター建築のため嘉数組に工事中博物館前庭一角の使用を許可す。
- 4月2日 朝日新聞社、沖縄タイムス社主催「これが沖縄だ」展に出品の文化財100点を送り出し、4月23日から6月26日まで、東京、名古屋、大阪、福岡、熊本及び那覇で開催され、6月29日全点返納される。
- 8月1日 米国スミソニアン博物館へ展示のため琉球八曲屏風と首里城の図を貸与す。
- 9月4日 大城館長は鄭元偉扁額受領のため、大宰府天満宮へ出向。
- 9月18日 鄭元偉扁額届く。
- 9月20日 博物館内の清掃請負入札を行ない、沖縄ビル管理株式会社が落札す。
- 9月30日 鄭元偉扁額の贈呈式を挙行、天満宮西高辻信貞宮司、松岡政保行政主席、山川泰邦立法院議長、真栄田義見文化財保護委員長ほか多数列席
- 10月29日 裏千家常任理事村上薫氏は中川伊作氏とともに茶室寄贈の件について大城館長と打合す。
- 10月22日 サントリー美術館主催「沖縄染織展」に当館所蔵の染織品20点を貸与す。
- 11月22日 サントリー美術館から染織品が返納され、感謝状を受ける。

博物館案内図



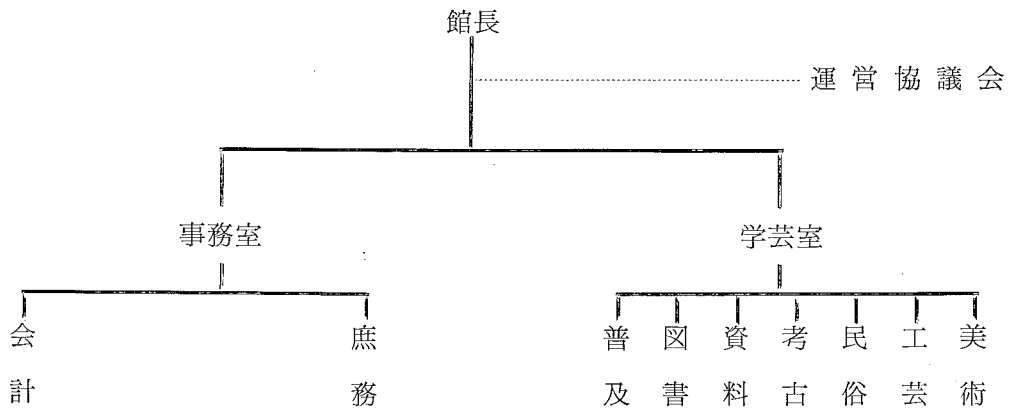
見取図



平面図

琉球政府立博物館機構及び職員構成

1. 機 構 (1969年現在)



2. 職員構成 (1969年2月現在)

職 名	職員数	職 員 名	
館 長	1	大城知善	
学芸職	4	外間正幸 (主任)	大城精徳 (美術)
		上江洲均 (民俗)	玉城盛勝 (考古)
事務職	4	野崎真美	上江洲キク
		知念朝健	新垣綾子
電気職	1	黒島 惇	
作業職	1	与儀ウシ	

3. 博物館運営協議会委員

会 長	真栄田義見 (琉球政府文化財保護委員長)
副会長	山城 善三 (沖縄観光協会専務理事)
学校教育関係	喜久山添采 (学校安全会理事長)
	大山 盛幸 (那覇市議会議員)
	国吉 順質 (那覇連合区教育委員会指導課長)
社会教育関係	比嘉 松吉 (文教局社会教育課長)
	宮里 慶仁 (南部連合区教育委員会社会教育主事)
学識経験者	金城 順一 (文教局指導部長)
	山元 恵一 (琉大助教授)
	阿波根朝松 (興南高等学校長)

博物館予算の推移 (過去10年間)

単位ドル

年 度	定 員	予算額	内 訳		
			運営費	資料購入費	事業費
1959年度	7人	\$ 11,603	5,378	6,225	—
1960	7	12,029	6,029	6,000	—
1961	7	10,005	6,785	3,220	—
1962	7	8,339	7,339	1,000	—
1963	7	10,420	9,220	1,200	—
1964	7	11,584	9,734	1,850	—
1965	7	12,265	10,613	1,652	—
1966	7	13,769	12,419	1,350	—
1967	7	41,451	18,683	1,500	21,268
1968	11	36,235	29,645	700	5,890

〔注〕 館報第1号で1967年度予算額41,403とあるのは41,451の誤りでした。

所蔵資料現在高

(図書資料を除く)

1968年6月31日現在

分類 収蔵別	分類									計
	陶器	漆器	染織	書画	石彫	木彫	金工	雑	米国よ り返還 のもの	
購 入	346	159	289	350	0	8	18	747	0	1917
寄 贈	376	74	84	113	15	17	75	222	52	1028
蒐 集	223	14	5	34	56	24	26	45	0	427
計	945	247	378	505	71	49	119	1,014	52	3,372

資料購入点数の推移

(過去10年間)

自 1959年度

至 1968年度

年度	分類	陶器	漆器	染織	書画	石彫	木彫	金工	雑	計
1959		17	10	46	18	0	0	1	217	309
1960		0	6	5	25	0	0	1	135	172
1961		6	10	4	16	0	0	0	7	43
1962		0	2	1	13	0	1	0	0	17
1963		0	0	0	6	0	0	0	0	6
1964		1	11	5	40	0	0	0	0	57
1965		3	11	2	0	0	0	1	1	18
1966		0	3	0	1	0	0	1	1	6
1967		2	10	2	0	0	0	1	1	16
1968		21	3	0	0	0	2	0	1	27

当館所蔵の指定文化財

特別重要文化財

名 称	種 別	指 定 年 月 日	備 考
木彫円覚寺白象並びに 趣意書木札	彫 刻	1958. 3. 14	全長120cm 頭高61.2cm 胴廻り93.9cm
世持橋勾欄羽目 志多伯開鐘 (三味線)	工 芸	1955. 5. 23	高さ33.3cm 横80.6cm 全長77.2cm 糸蔵3.5cm 重量440g
旧首里城正殿前梵鐘	“	1958. 3. 14	高さ154.5cm 口径94cm 重さ600kg
評定所 格 護 定木おもろさうし	典 籍	“	22巻
評定所 格 護 定本混効験集	“	“	縦25.5cm 横20cm 枚数227枚

重要文化財

名 称	種 別	指 定 年 月 日	備 考
玉 陵 石 彫 獅 子	彫刻	1956.12.14	2基 各高さ1.17m 胴廻り1.21m
間得大君御殿雲龍黄金簪	工芸	“	全面黄金張 全長28.4cm、直径11cm 重量21g
黒塗螺鈿遊雁絵大文庫	“	“	高さ16cm 縦41cm 横31cm 重さ2.29kg
黒塗堆錦山水絵大文庫	“	“	高さ14cm 縦40.8cm 横31.7cm 重さ3.45kg
黒塗螺鈿雲龍文内金箔 蓋付碗	“	“	3口 高さ11.8cm 重さ160g 直径12cm
三味線「江戸与那」	“	“	全長80cm 心長21.6cm 糸蔵4.8cm 重量503g
宮古島下地の首里大屋 子への辞令	古文書	“	縦28.5cm 横82.5cm
評学所 格 護 定本 中山世鑑	典籍	“	6巻
評定所 格 護 定本 中山世譜	“	“	19巻

施設使用状況

1. 講 堂

1968.4.9~1969.3.2

年 月 日	使 用 内 容	主 催 者 名	人 員
1968. 4. 9	沖 縄 文 化 講 座	国 際 婦 人 ク ラ ブ	150
4月7.14.21.28	日 曜 映 写 会	博 物 館	250
5. 11	組踊伝承者打合せ会	文 化 財 保 護 委 員 会	70
5. 14	沖 縄 文 化 講 座	国 際 婦 人 ク ラ ブ	200
5.17~18	第十回 国際図書館大会	図 書 館 協 会	200
5. 19	組 踊 伝 承 者 の 稽 古	文 化 財 保 護 委 員 会	60
5. 26	"	"	"
5月4.11.19.26	日 曜 映 写 会	博 物 館	300
6. 1	家庭科教師のつどい	全 沖 縄 高 校 家 庭 教 育 研 究 会	120
6. 3	ひとみ座「ひよっこりひ ようたん島」公演	琉 球 新 報 社	1,300
6. 23	組 踊 五 番 の け い こ	文 化 財 保 護 委 員 会	60
6. 30	"	"	"
6月2.9.16.30	日 曜 映 写 会	博 物 館	350
7. 20	中南部地区高校英語弁論 大会	那 覇 青 年 会 議 所	200
7. 21	講 演 会	茶 道 裏 千 家 淡 交 会 沖 縄 支 部 青 年 部	100
7. 26	静岡県勤労青年沖縄派遣 団と交歓	琉 球 政 府 総 務 局 総 務 課	30
7.7.21	日 曜 映 写 会	博 物 館	70
8.1~ 3	創 立 一 周 年 芸 能 大 会	沖 縄 時 報 社	600
8. 4	講 演 会 及 び 総 会	沖 縄 民 俗 同 好 会	50
8. 7	映 写 会 「若 者 たち」	在 本 土 沖 縄 県 学 生 会 連 絡 会 議	500
8. 10	高 校 英 語 弁 論 中 央 大 会	沖 縄 青 年 会 議 所	200
8.21~23	研 究 発 表 大 会	沖 縄 高 校 農 業 ク ラ ブ 連 盟	1250
8. 25	琉 大 史 学 会 第 2 回 総 会	琉 球 大 学 史 学 会	200
9. 14	第 3 回 学 校 新 聞 ゼ ミ ナ ー	沖 縄 時 事 出 版 社	200
9. 18	新 任 教 師 の た め の 講 習 会	久 場 崎 米 人 学 校	400
10. 10	円覚寺総門工事記録映画 試写会	伊 波 久 雄	20

10. 20	キリスト教科学に関する講座	ウィリアム、A、バクスター	50
10. 22	組踊、観光映画の鑑賞	東風平中学校	280
10.26~27	親と子の演劇教室	劇団沖縄たんぽぽ	1200
11. 1~ 7	映写会(一般公開)	文化財保護委員会	300
11. 13	沖縄文化講座	国際婦人クラブ	350
11. 22	映画鑑賞会	松島中学校	200
11月21.26	紅型及びその他の工芸品の撮影	N H K 沖縄総局	10
11. 24	英語劇	琉大英語クラブ	20
11. 27	映画「イザイホウ」試写会	文化財保護委員会	200
11. 30	家庭クラブ南部地区研究発表会	家庭科教育研究会南部支部	640
12月4.11.15	組踊記録映画製作けいこ	文化財保護委員会	100
12. 5	英語劇	琉大英語クラブ	20
12.7~8	大学祭研究発表会	琉球大学祭常任委	800
12. 11	沖縄文化講座	国際婦人クラブ	350
12月1.14	箏曲発表会	琉球大学箏曲クラブ	400
12. 19	講演会	琉球大学史学科	250
1969. 1. 8	沖縄文化講座	国際婦人クラブ	350
1.24~25	全沖縄高校家庭クラブ研究発表会	全沖縄家庭クラブ連盟	700
2. 12	沖縄文化講座	国際婦人クラブ	200
2.13~16	演劇教室	劇団たんぽぽ	3150
2. 18	組踊記録映画試写会	文化財保護委員会	150
2.28~3.2	学習発表会	城西小学校	2,520

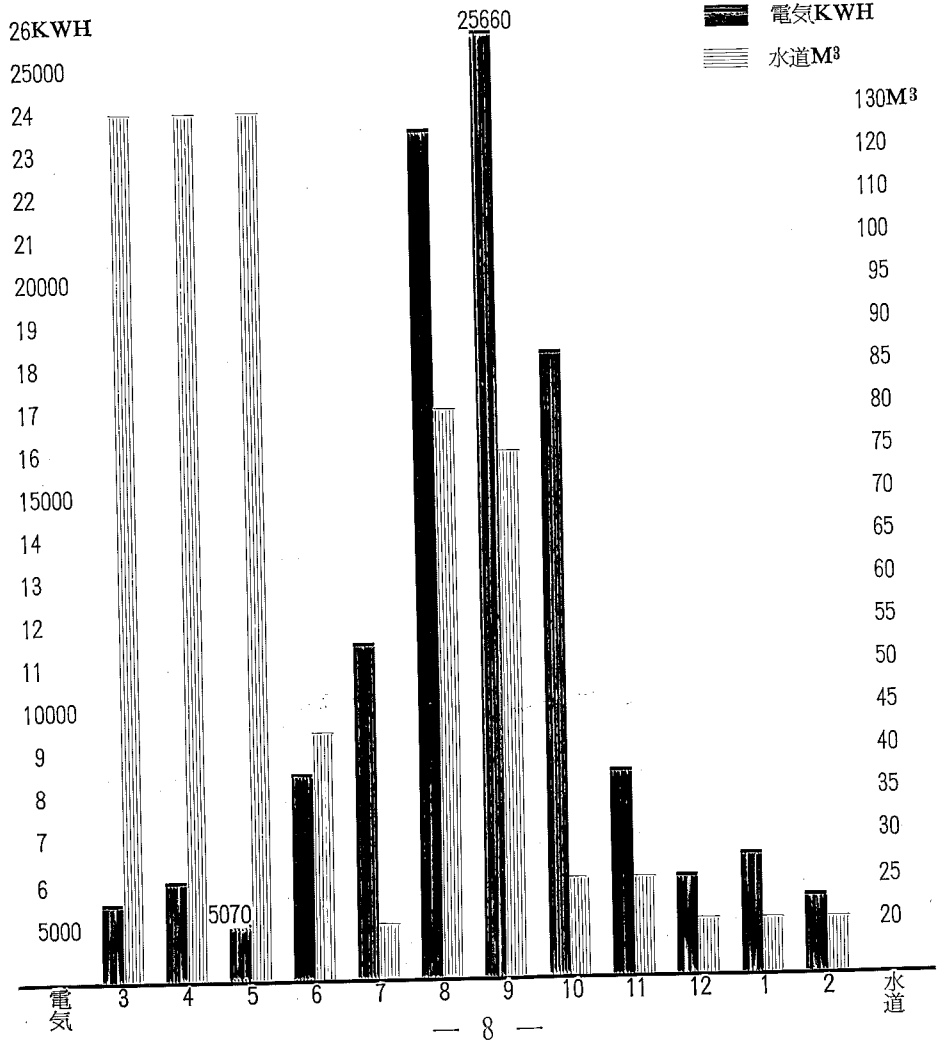
2. 臨時陳列室

1968.3~1969.2

年月日	使用内容	主催者名
1968.2.15~3.6	書跡展	博物館
3. 7~ 3.17	琉球美術展	琉球美術会
3.22~ 4.14	玉陵写真展	郷土の文化を守る会、博物館
4.19~ 5.16	博物館所蔵絵画展	博物館
5.18~ 6. 2	チャールズ会絵画展	沖縄チャールズ会

6. 6~ 6.30	中国現代美術展	琉球国際美術連盟
7. 4~ 7.30	勝連城発掘展	文化財保護委員会、博物館
8. 1~ 8.17	時報招待美術展	沖縄時報社
8.23~ 9. 8	洋画個展	山里永吉
9.17~ 9.29	洋画個展	名渡山愛順
10. 1~10.13	琉球金石碑文拓本展	沖縄拓本研究會
10.15~10.20	洋画個展	大城皓也
10.26~11.10	絵画二人展	スタイン夫人・ベンスン夫人
11. 1~ 7	指定文化財陳列(於ロビー)	博物館
11.12~22	彫刻展	槐會
11.13~30	螺鈿細工個展(於ロビー)	稻福政祐
11.27~12. 5	創斗會洋画展	創斗會
12. 7~15	赤土會洋画展	赤土會
12.20~12.29	洋画二人展	レイカー夫人・平良晃
1969.1.10~2.9	写真展「沖縄戦とその直後の生活」	博物館

月別消費電力量及び水道量



入 館 者 数

1. 参観者統計

(1959~1968)

年 別	人 数	備 考
1 9 5 9	99,841	
1 9 6 0	74,010	
1 9 6 1	94,097	
1 9 6 2	119,437	
1 9 6 3	119,281	
1 9 6 4	150,935	
1 9 6 5	89,593	
1 9 6 6	135,386	1966年11月3日 新館開館 10月休館
1 9 6 7	229,464	日本古美術展開催 1月2月で13万人
1 9 6 8	97,062	
計	1,209,106	

2. 月別参観者数及び入館料

(1968.3~1969.2)

項目 月	大 人	学 生	生 徒	計	開館日数	1日平均	入館料	備考
3	5,934	3,436	3,633	13,003	26	500	\$ 680.23	
4	2,859	457	635	3,951	23	171	315.17	
5	4,230	241	3,068	7,539	24	314	420.41	
6	4,082	422	2,186	6,690	25	267	397.24	
7	2,812	1,118	1,104	5,034	26	193	299.03	
8	4,119	3,161	1,937	9,217	26	354	487.30	
9	2,415	344	534	3,293	23	143	234.07	
10	3,647	382	6,060	10,089	26	388	458.73	
11	5,239	714	13,525	19,478	26	749	743.60	
12	2,968	589	2,310	5,867	25	255	352.14	
1	3,866	408	1,625	5,899	23	256	416.55	
2	5,777	405	4,791	10,973	24	457	534.88	
計	47,948	11,677	41,408	101,033	297		5342.35	

主なる来館者

1968年1月

染織工芸家柳悦孝氏、岡村吉右衛門氏、日本民芸館長浜田庄司氏、東京大学名誉教授宮沢俊義氏

2月

倉敷民芸館長外村吉之介氏、大原美術館長藤田慎一郎氏、家の光編集次長大谷巖氏、染色工芸家芹沢銈介氏、福岡市文化連盟事務局長鬼頭鎮雄氏、東邦経済社長漆島参治氏、日本文保委文部技官内山哲氏、宮城県知事高橋進太郎氏、衆議院議員長谷川峻氏、東京放送局社長今道潤三氏、作家阿川弘之氏、安岡章太郎氏。

3月

早稲田大学教授西村朝日太郎氏、東京体育館長廣田宗三氏

4月

三越本店美術部長加藤賢治氏、漆器研究家李汝寛氏

5月

社会評論家村上兵衛氏、香川県知事金子正則氏、衆議院議員高橋清一郎氏

6月

日本政府総理府副長官弘津恭輔氏、島根県知事田部長右衛門氏

7月

日本政府会計検査院参事官高橋保司氏、甲南大学教授永岡智郎氏、武蔵大学学長正田建次郎氏、日本文化財保護委員会文部技官鈴木嘉吉氏

8月

文部省大臣官房総務課沖繩班岩間徹三氏、彫刻家西田明史氏

9月

サントリー美術館参事本田忠義氏、横浜国立大学教授宮城栄昌氏、ハワイ大学助教授リチャードピアソン氏、大宰府天満宮宮司西高辻信貞氏、参事安恒篤氏

10月

画家中川伊作氏、裏千家常任理事村上薫氏、総務主任千坂秀学氏、営繕担当主任信国勝明氏

11月

日本住宅公団東京支所長尚明氏、サントリー美術館参事加藤定範氏

12月

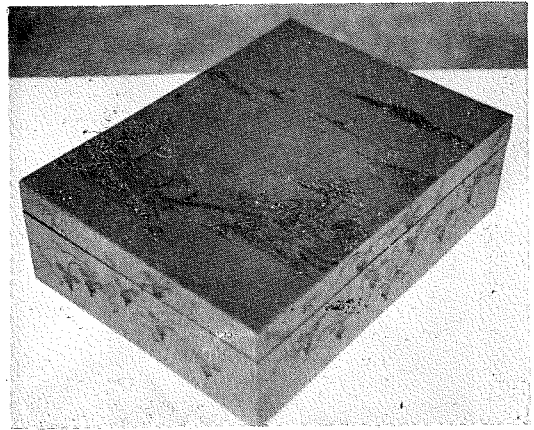
文部技官服部文雄氏、日本学術会渡辺武男氏、東洋美術歴史研究家フィナ・バーダック氏、東京教育大学教授和歌森太郎氏、東京教育大学教授国分直一氏

1969年1月

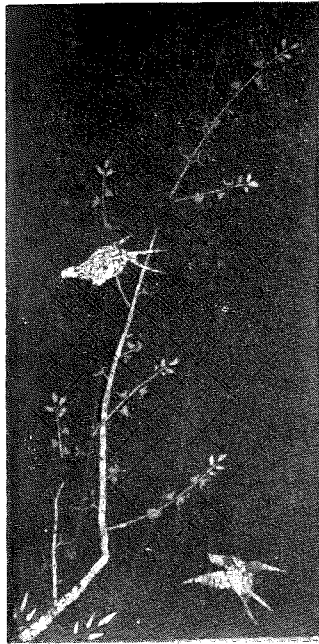
日米琉諮問委員会調査官島田治氏、文部省三木彰氏、井内慶次郎氏、日本古文書学会会長伊木寿一氏、立正大学助教授高島正人氏

主なる新収蔵品写真

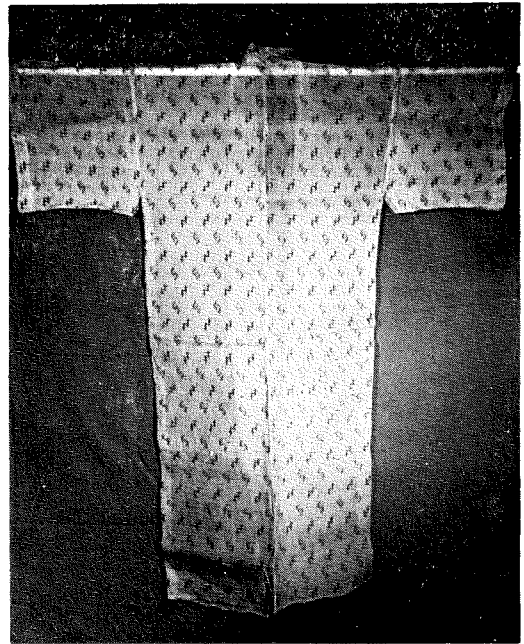
金箔
絵
東道
盆



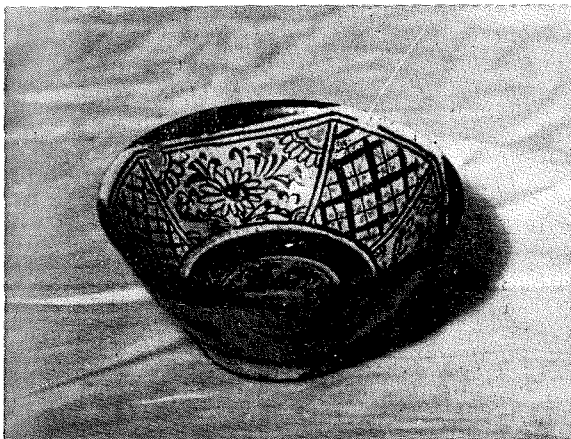
朱塗山水絵堆錦文庫



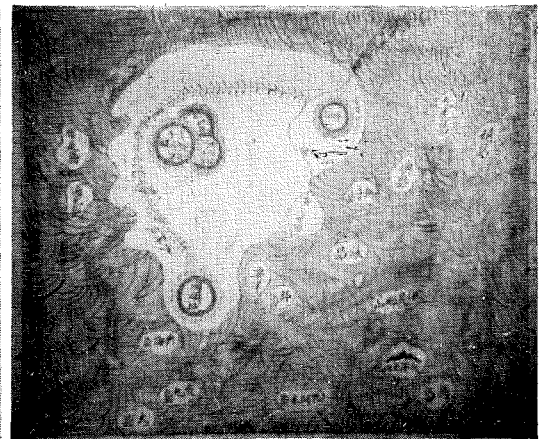
尺模
様地
花鳥
螺鈿
長箱



芭蕉
布
絁着
物



垣に菊花赤絵碗



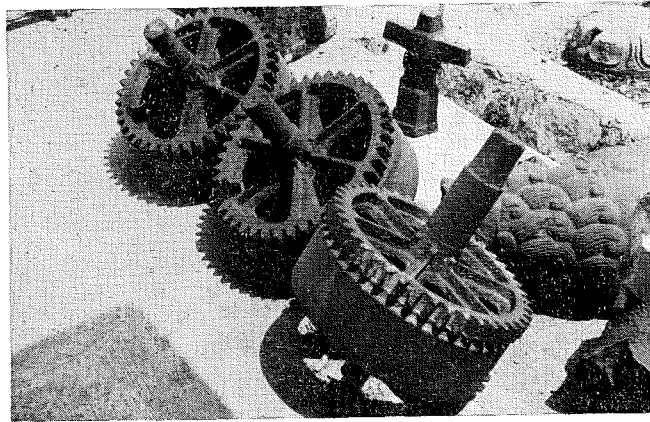
琉球国地図



蓮に水禽図



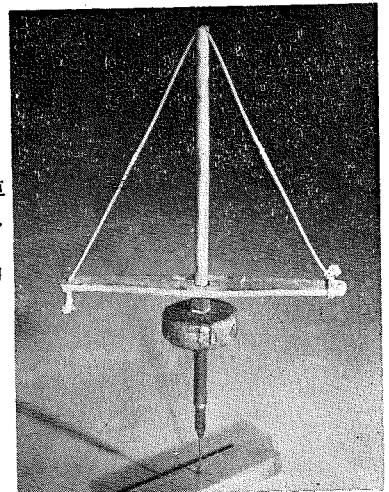
絵文字彫刻石



鉄製砂糖車



臼



車イリ

新 収 蔵 資 料

1 購 入 の 部

(1967年7月1日～1969年2月28日)

分 類	品 目	数 量	備 考
陶 器	貼紋酒入	1	
	素焼龍樋	1	
	飴釉茶家型燈明台	2	1 対
	灰釉燈明台	2	1 対
	独楽型台付燈明台	1	
	雲模様赤絵茶碗	1	
	飴釉茶碗卓	1	
	飴釉面付花瓶	2	1 対
	灰釉に呉須面付花瓶	1	
	水甕型素焼小壺	1	
	耳付素焼小壺	1	
	素焼鯨	1	
	椰子型德利	1	
	黒釉耳壺	1	
	皮袋型素焼酒入	1	
	素焼小鉢	1	
	飴に灰釉渡名喜瓶	1	
	素焼急須	1	
	素焼一合德利	1	
	垣に菊花赤絵碗	1	
染付碗	1		
漆 器	春慶塗湯庫	1	
	黒漆朱絵(松竹梅)椀	1	
彫 刻	木製龕鴟尾	1	
	木製龍頭	1	
民 俗	椰子小	1	
	鉄製砂糖車	1揃	車3 ゴイント1
漆 器	朱塗 山水絵堆錦文庫	1	
	朱塗 山水絵堆錦硯箱	1	
	卍模様地花鳥螺鈿長筥	1	
計		33	

2 寄 贈 の 部

分 類	品 目	数 量	寄 贈 者 (敬称略)
陶器	青釉浅鉢・香炉 他	7	那覇市 名 嘉 徳 盛
〃	油 壺	1	那覇市 上 江 洲 均
〃	油 壺	1	米国 ジェームス・M・ワトソン
〃	アラマカイ	1	那覇市 上 間 伸 代
〃	油 壺	4	琉球国際婦人クラブ
〃	急須(知花焼) 他1	2	那覇市 稲 福 政 祐
〃	徳 利 他1	2	久米島 上江洲 ウ シ
染織	芭蕉布緋着物	1	那覇市 饒平名 商 店
〃	久米島袖	1	久米島 仲 村 テ ル
〃	麻 衣	1	久米島 上江洲 智 道
漆器	金箔絵東道盆	1	那覇市 伊 波 国 夫
〃	祭具	3	那覇市 上 江 洲 謙
〃	黒塗櫛箱	1	那覇市 阿波根 朝 次
金工	銅鏡	1	コザ市 新 城 ツ ル
〃	カンザシ	2	那覇市 泉 川 和 久
〃	香炉(銅製)	1	那覇市 金 城 ト シ
書跡	渡唐勤学願書	1	那覇市 富 村 有 徳
〃	御直達之写 他3	4	那覇市 伊 波 国 夫
〃	砂川双紙	1	平良市 岡 本 恵 昭
楽器	六線	1	伯 国 新 川 郎 吉 夫
絵画	蓮に水禽図 他1	2	那覇市 伊 波 国 夫
歴史	琉球国地図	1	那覇市 ウイリアム・ストックトン
考古	絵文字彫刻石 他2	3	那覇市 上 江 洲 均
〃	石斧	1	コザ市 新 崎 盛 繁
自然	貝化石	1	平良市 砂 川 真 長
民俗	石製砂糖車	1	那覇市 禰 覇 朝 行 文
〃	稲こき管	1	那覇市 宮 城
〃	タカヤーマ 他8	9	栗国村 神 里 金 達
〃	アンデイル	1	栗国村 新 里 善 栄
〃	タケジチャー 他1	2	栗国村 上 原 秀 助
〃	ンムクジシリー	1	栗国村 宮 里 恭 人
〃	ムジシリ石 他3	4	栗国村 照 喜 名 政
〃	ヒーフチ	1	栗国村 与 那 嶺 亀
〃	ガイストチャー	1	栗国村 内 嶺 節 子
〃	ユクテイ	1	栗国村 新 城 マツエ

分類	品目	数量	寄贈者(敬称略)
〃	ガンシナー	1	栗国村 山内 安子
〃	ウーシ(白) 他1	2	久米島 上江洲 智道
〃	イーワヤー(蘭割り)	1	糸満町 大城 長盛
〃	マーガ	1	糸満町 城島 豊正
〃	ウーシ(白)	1	米国 ジョン・イングレス二世
民俗	フジョー	1	嘉手納村 知念 吉三
〃	たばこ盆一式	1	久米島 上江洲 ウシ
〃	車イリ(きり)	1	糸満町 玉城 孝
〃	チチヌヂ	1	那覇市 上江洲 謙
〃	〃	3	久米島 仲村 テル
〃	イピラ 他1	2	那覇市 具志堅 政治

新収蔵図書

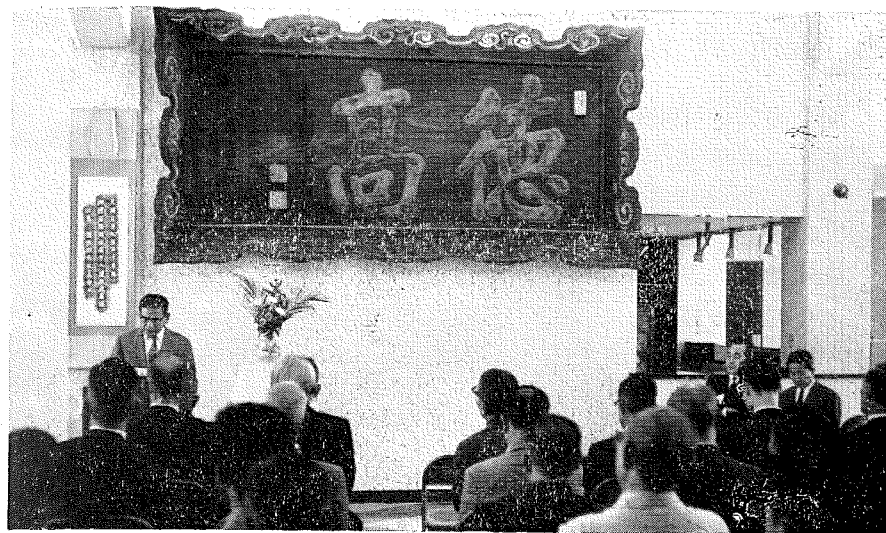
寄贈の部

(1967年7月1日～1969年2月28日)

書名	部数	寄贈者名
日本美術年鑑 昭和41年版 42年版	2	東京国立文化研究所美術部
ARTS 他 2	3	民政府教育部長 エバンズ
民族資料図版目録 第1巻 第2巻	2	文部省民族資料館
那覇市史 1巻の1 2巻の下	2	那覇市
那覇市統計書 第7回 第8回	2	〃
沖縄県史 16・17・20・21巻	4	沖縄史料編集所
那覇商工名鑑 1968年版	2	那覇商工会議所
MOUSEION No.14	1	立教大学
日本の鋸	1	吉川金次
大阪府の川と魚の生態	1	大阪府水産林務課
千葉県東金市家之子古墳群	1	文正大学文学部
沖縄経済の現状 1967年版	1	琉球政府
洋書増加目録 他 1	2	琉大図書館
那覇 67 市政要覧	1	那覇市
芸術による教育	1	植村鷹千代
おもろさうし全釈 1巻～5巻	5	島越憲三部

書名	部数	寄贈者名
鉄と琉球	1	崎間敏恵
邪馬台と太宰府 他 5	6	西高辻信貞
目録色鍋島 他 1	2	大城知善
サントリー美術館目録	1	サントリー美術館
日本の美(離島)	5	国際情報社
沖縄の美術	1	宮城篤正
東京国立博物館紀要 第三号	1	東京国立博物館
老海苔中世遺構の調査	1	市立函館博物館
沖縄写真名鑑 68	1	沖縄商工興信所、玉城幸助
沖縄社会教育の現況 67	1	文教局社会教育課
文教時報 112	1	文教局総務課
博物館研究 41の1 41の2	2	日本博物館協会
大阪市立自然科学博物館々報	1	大阪市立自然科学博物館
熊野灘漁村資料集	1	三重県立博物館
日田市立博物館報	1	日田市立博物館
天草切支円館資料目録 他 1	2	本渡市立博物館
成田山考古資料解説目録 他 2	3	成田山靈光館
津山郷土館報 1集 2集	2	津山郷土館
岡山民俗 78、79	2	岡山民俗学会
交通博物館概要 昭和43年	1	交通博物館
長崎県立美術博物館々報 他 1	2	長崎県立美術博物館
石橋美術館々報 No.11 他 1	2	石橋美術館
国立近代美術館年報	1	東京国立近代美術館
西都原の古墳	1	宮崎県立博物館
三重県方言 22、23	2	三重県方言学会
藤原岳の混虫 他 2	3	清水実
人力車	1	寺岡良顕
伊江島具志原貝塚調査概報	1	友寄英一郎
大歓 他 5	6	山種美術館
日本伝統美術展 他 2	3	サントリー美術館
県展のあゆみ 他 3	4	和歌山県立博物館
オキナワグラフ	6	オキナワグラフ社
MUSEUM	12	東京国立博物館
あるく、みる、きく	15	近畿日本ツーリスト株式会社
旧白萩村の民俗	1	東洋大学民俗研究会

鄭元偉扁額「徳高」の受入れについて



贈呈式のもよう

< 経 過 >

1968年5月、福岡での展覧会に出席した大城館長が、大宰府天満宮を訪れ、同宮絵馬堂に掲げられた扁額の話聞き、貴重な民族遺産をぜひ譲ってほしい旨申し入れた。そこで宮側の理解ある内諾を得、さらに8月10日には主席名による要請書を送り、正式の譲渡のはこびとなった。その後9月4日、館長が上福し、同天満宮で譲渡式が行なわれた。同18日には扁額が届き、早速ロビーの壁に取付け、30日の贈呈式にそなえた。

その間、西高辻宮司ならびに宮側の御厚意をはじめとして、交渉の便宜をはかって下さった沖縄タイムスの牧志伸宏氏、海上輸送の琉球海運、及び取付け作業の国場組の無料奉仕など、多くの方々の理解と協力によって実現したものであるということを銘記しなければならない。

< 贈 呈 式 >

9月30日午後3時から、はるばる出席された西高辻宮司、安恒氏をはじめ、琉球政府側から岸本労働局長（主席代理）、金城文教局指導部長（文教局長代理）、山川立法院議長ら政府関係者をはじめ、鄭元偉子孫の古波蔵丕明氏、湖城満二氏ら約100名を招待して行なわれた。

式は金城指導部長の開会のことばではじまり、ついで外間博物館主事の経過報告のあと、西高辻宮司と岸本労働局長の手で除幕が行なわれた。ついで西高辻宮司から琉球政府に寄贈の覚書が手渡され、琉球政府からは感謝状を西高辻宮司に送った。参列者には、宮側から天満宮のお守りや案内書が配られ、珍しい飛梅の梅干しも出て、盛会裏に5時閉会した。

扁額はたて1.85m、よこ3.70m、厚さ4cmのケヤキ材である。嘉永5年（1852年）天満宮950年祭に薩洲の商店から奉納されたもの。当時琉球書家の第一人者鄭元偉（湖城親方長烈）61才の揮毫で、島津公の招聘で薩藩滞在中に依頼されて揮毫したものであろうといわれる。

なお当館では贈呈式に間に合わせ寄贈記念誌を発行し、参列者はもちろん関係者に送付した。

博物館主催行事について

当館所蔵書跡展

期間：1968年2月15日～3月6日
場所：臨時陳列室

当館所蔵の書跡を一堂に集めて展示するのはこれが最初で、代表的な作品24点を展示した。芸術としての書ばかりでなく、古文書として歴史的価値の高いものも配した。書家としては、代表的な能書家、歴史的人物等の書のほかに中国の書家も含まれている。

古文書としては、重要文化財指定の「宮古下地大屋子へ与えた辞令書」や「王朝時代の出生届」など4点。特に前者は島津入り前の万暦23年（1595年）のもので、きわめてのびのびした筆致である。「出生届」の方は1833年、56年、69年、71年と19世紀中期のものである。

有名書家の書としては、鄭嘉訓、鄭元偉父子をはじめ、お家流の能書家として知られる渡嘉敷親雲上（トカシチペーク）がおり、歴代の国王の中で能書家と云われる尚温王、尚育王や悲劇の王子・玉川王子尚慎、桂园派の香川景樹に私淑して和歌にすぐれた才能を発揮した19世紀中期の摂政浦添王子朝熹、18世紀後期の摂政読谷山王子朝恒の書などである。

中国人としては、歴史的人物である林則徐、「中山伝信録」の著者徐葆光、全魁、林鴻年、趙新、趙文楷など冊封使の外、随員の詩人王文治らの名も見える。

<書名及び書家>

- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| ○宮古下地大やこへ与えた辞令書（重文，1595年） | ○王朝時代の出生届（1833年～1871年） |
| ○羽地間切屋我ノロへ与えた辞令書（1625年） | ○天願里之子親雲上へ与えた褒美状（1806年） |
| ○尚温王書（在位1795年～1803年） | ○尚育王書（在位1828年～1847年） |
| ○鄭嘉訓書（1767年～1832年） | ○鄭元偉書（1792年～？） |
| ○玉川王子尚慎書（19世紀中期） | ○浦添王子朝熹書（19世紀中期） |
| ○読谷山王子朝恒（18世紀後期） | ○中山副使向元模書（江戸上りの使節） |
| ○中山楽童子毛徳昌書（江戸上りの踊手） | ○伝渡嘉敷親雲上書（18世紀） |
| ○全魁書（1756年尚穆王の冊封正使） | ○林鴻年書（1838年尚育王の開封正使） |
| ○王文治書（1756年全魁の随員） | ○趙文楷書（1800年尚温王の冊封正使） |
| ○林則徐書（1785年～1850年） | ○徐葆光書（1719年～尚敬王の冊封副使） |
| ○趙新書（1866年尚泰王の冊封正使） | ○楔和鳴書（1855年） |
| ○何冠英 | ○楔玉華 |



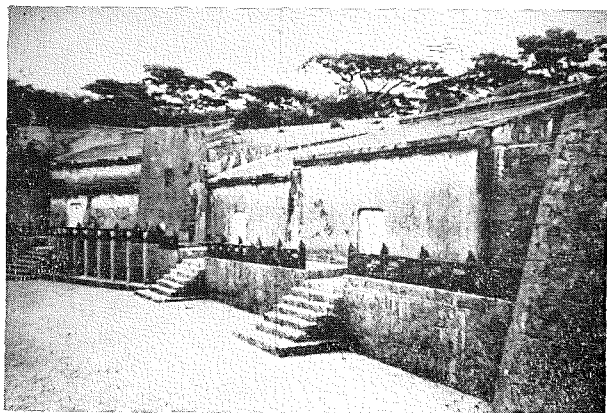
尚温王書

玉陵写真展

期 間 : 1968年3月22日~4月16日

場 所 : 臨時陳列室

第二尚氏の墳墓玉御殿（たまおどん）は、今次大戦で破壊されたが、その霊域は現在も特別史跡に指定されている。戦前の写真により、玉御殿のよさを再認識させようとのねらいで、「郷土の文化を守る会」と当館の共催によって行なわれた。



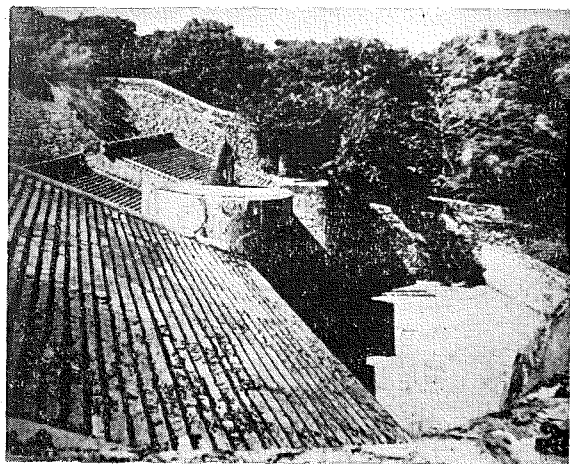
玉陵全景（戦前）

墓堂は総体連続しているが、大別して中央及び左右の三部に分れ、中央部のは洗骨前の遺体を容れ、その左（東側）の墓堂は洗骨後の王及び王妃の遺骨を収める所であり、右（西側）の墓堂は洗骨後の家族の遺骨を収める所である。共に石造で墳墓として、また石造建造物として琉球最高級のものである。16世紀初頭尚真王が父尚円王の遺骨を収めるために建造したもので、現存する玉陵碑（特別重要文化財）にはここを使用すべき王家の人々の名が記されている。また、伊東忠太博士をして「鬼気身にしみる閑寂の裡に、一種の神秘的な魔力がひしひしと人を襲うような気分である」といわしめた塔上の一對の獅子は、現在重要文化財に指定され、当館ロビーに陳列してある。

「世界にどんな墳墓があろうと、私たちは琉球の玉陵において、より鬼気迫る

もの凄じばかりの墳墓を見たことがありません。（中略）玉陵はただ琉球最大の陵墓であるというのみならず、その幽玄なるにおいて、その神秘なるにおいて、匹敵しうるものは世界においても稀でありましょう。」

（柳宗悦氏）など大家のことも数点パネルにして掲示した。



東側丘上より墓庭を望む（戦前）

写真点数 約30点

当館所蔵古絵画展

期 間 1968年4月19日～1968年5月16日

場 所 : 臨時陳列室

沖縄の古い美術品は1945年の沖縄戦でその殆んどが戦災を受け、めぼしい作品は残っていない。しかし、さいわい本土在住の本県出身の人々の所蔵していたものはその難をまぬかれ、当館では1953年以来今日までこれらの蒐集（購入又は寄贈の形で）に力を注ぎ、現在ではその数も100余点に及んでいる。この中には王朝時代の代表的画家達の作品も数点含まれ、その内容もやや充実してきている。

この展覧会には、その中から展示に堪え得るもの30点を選んで供覧したもので、これだけの作品を一堂に集めて一般の鑑賞に供したのは当館では始めてのことであった。

出品された作品は、花鳥、山水をはじめ、風俗画、人物画等琉球の古い絵画の一端を知り上できわめて意義深い展覧会として好評を博した。代表的な作品としては、伝自了筆の「寿老人」（17世紀初期）、殷元良筆の山水図や花鳥図（18世紀中期）、その他呉著仁や慎思九等の山水図（18世紀後期から19世紀初期）が陳列され、風俗画は18世紀から明治初期までの沖縄の風俗を描いたものが主で、なかでも琉球美人図や楽童子、八重山のうやんまあ図、婚姻風俗図等に人気があつまった。



殷元良筆 花鳥図

<出品目録>

牡丹白鳩の図	(不 詳)	人物図	(谷 文 晁)
蘭図	(毛 世 輝)	酒造の図	(北 齊)
水墨竹図	(喜 禪)	竹の図	(殷 元 良)
古琉球風俗美人弹琴の図	(不 詳)	墨梅	(安立道者 介石)
琉虬菜園鳥虫図	(不 詳)	草花群虫の図	(南嶺沈詮)
寿老人	(伝 自 了)	関羽、張飛の図	(馬 元 欽)
芭蕉墨絵	(長嶺華国)	円覚寺大雄殿壁画模写(部分)	(鎌倉芳太 郎氏)
竹甘草に小禽	(不 詳)	渡海観音	(内間鳳逸)
琉球躑躅の図	(不 詳)	琉球風俗(魚売りの図)	(不 詳)
琉球風俗楽童子の図	(政 演)	山水図	(慎 思 九)
国王位牌の下図	(田名宗経)	うやんまあ図	(不 詳)
御冠船図	(不 詳)	鄭和橋肖像画	(不 詳)
蓮に雀図	(狩野探幽)	琉球彩絵牡丹花図	(不 詳)
牡丹図	(谷 文 晁)	関帝王	(呉 著 仁)
〃	〃	〃	(不 詳)

勝連城跡発掘資料展

期 間 1968年7月4日～7月30日

場 所 臨時陳列室

勝連半島の脊梁丘陵の西端にあり、四面強固な岩壁に囲まれ、本丸を標高98mのところにおき東側へ二の丸、三の丸、四の丸とくだっている。その面積は3,672坪で行政上は勝連村字南風原になっている。

勝連城についての研究は、柳田国男氏が「海上の道」に勝連文化の存在を説き、日本文化の東廻りを主張している。言語学上から奥里将建氏は院政時代の貴族が遠く南国にのがれ南島人を支配し覇を確立したと考え、その根拠を勝連方言と院政貴族語との類似性においている。

沖縄の城（グシク）の発生は10世紀ごろ土のいや竹木の垣による構築が見られ、石積みの城郭が形成されてくるのは12世紀のころからと考えられている。勝連城は城（グシク）の発生期から完成期までの姿を知ることができる比較的多くの資料がそろっている。城壁の南側に南貝塚、北側に北貝塚があり貝塚の時代から城の形成期へ移向がみられ、また城主（按司）が出現し幾代かの間に整備され、15世紀中期に最も栄えた最後の城主（按司）阿麻和利が第一尚氏尚泰久王に滅ぼされるまでの長い間沖縄の中原に覇権と文化の華を咲かしていた一連の時代があった。

勝連城の勢力は、勝連半島のみならず高江洲（具志川村）、見里（美里村）さらに遠く与論島あたりまで範領とした。東の半島部と離島群を配下におき、日本・南方諸国・中国との貿易も盛んで多くの富を収積し、中山王との勢力争いもあったであろう。このような沖縄の歴史に重要な地位を占める勝連城跡の発掘調査が1964年9月から1966年にわたり三次の調査が文化財保護委員会によって行なわれた。

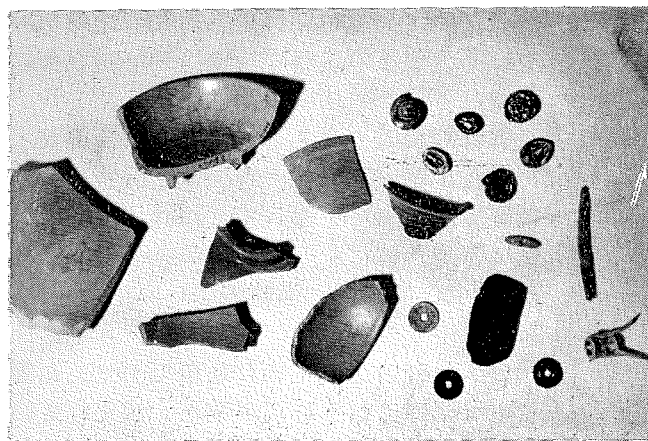
この展示会には第一次、第二次の2回の調査の際の資料の展示をした。その内容

は鉄製品（刀子、釘、鋸等）玉類、中国陶磁片、彩色陶片、屋根瓦、中国古銭（開元通宝～宣徳通宝の18種）、城趾系土器片、貝製品、土製球、獣骨、骨製織具、サイコロ、等に及んだ。

この種の展示会は資料の不足等で陳列される機会が少なかったが文化財保護委員会の協力の下になされ、学生、生徒や一般来館者に好評にうけとられた。



住居柱穴



勝連城跡出土品の例

写真展「沖縄戦とその直後の生活」

期 間：1969年1月10日～
1969年2月9日

場 所：臨時陳列室

この展覧会は、24年前に沖縄の人々が体験した曾ってない歴史的な運命と試練の一端をみてもらい、それを体験した世代は勿論、体験しなかった若い世代にも、それぞれの立場から、なんらかの意義を汲みとってもらう目的で開催されたものである。

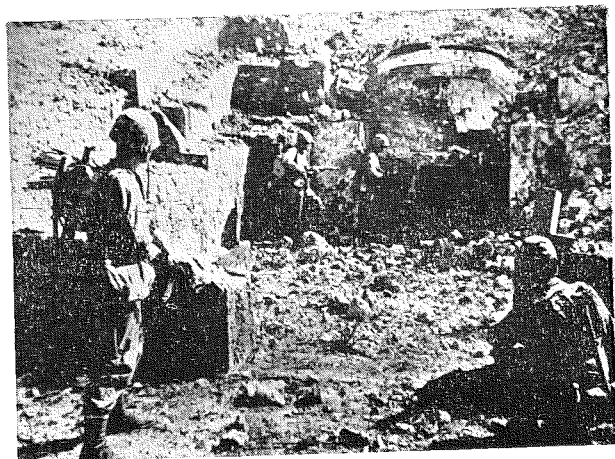
展示された写真は、米軍の上陸の様を始め、戦闘中の米軍のクローズアップ、破壊のすさまじさ、さ迷う難民、飢餓の戦災孤児、そして、やがて社会の秩序も回復し、演芸会等も催されて人々の顔に笑顔がよみがえる1946年頃までの総計92点で、各方面から予想以上の反響が寄せられた。

展示数92点のうち、8点はズケラン

在米陸軍博物館所蔵の沖縄戦記録写真を復写、残り84点は、沖縄戦直後米海軍々政府教育部長であったハンナ少佐（当時大尉）が各地で撮ったスナップ写真から引伸ばしたものである。

ハンナ少佐は当時混乱した沖縄の教育、文化の秩序を回復し、しかも沖縄文化に対する深い認識をもってその保護育成につとめ、数多くの功績を残した人である。因みに、全少佐は住民が未だ虚脱の毎日をおくっているとき、いち早く沖縄の文化財の保存の重要さを痛感し、東恩納に博物館を設立して、現在の政府立博物館の基礎を確立するなど、その功績は多大である。

これらのスナップ写真は、全少佐の友人であるジョージ・H・ケア博士（著名な沖縄歴史研究家）を通じて、1966年9月に当館に寄贈されたものであるが、その数は総計600余枚に及び、当時の悲しい生活や、不自由な中での教育及び文化活動、米軍と住民のふれ合いから生まれた新しい生活等貴重な記録になる写真が数多く含まれている。



一九四五年沖縄戦 墓にひそむ日本軍を掃蕩中の米軍



戦後初めての投票

職 員 の 活 動 状 況

- 1968年1月2日～5日 沖縄大学の「糸満町真栄里遺跡」の発掘調査に参加(玉城主事)
- 3月4日 文化財保護委員会の「銘苅子遺跡」の発掘調査に参加(玉城主事)
- 3月4日～10日 粟国島の民俗調査(上江洲主事)
- 3月27日～4月17日 外間主事ヨーロッパ各国の美術館、博物館視察旅行
- 4月23日～30日 「これが沖縄だ」展東京開催中出品物管理のため出張(外間主事)
- 4月30日～5月25日 「これが沖縄だ」展名古屋、大阪開催中出品物管理のため出張(大城主事)
- 5月5日～16日 久米島の考古資料調査(玉城主事)
- 5月16日～6月13日 「これが沖縄だ」展福岡、熊本開催中出品物管理のため出張(大城館長)
- 6月27日～29日 北部各村の民具調査(大城主事)
- 8月1日～15日 文化財保護委員会の「辺戸宇佐浜遺跡」の発掘調査に参加(玉城主事)
- 9月4日 大城館長鄭元偉扁額受領のため大宰府天満宮へ出向
- 10月16日 外間主事サントリー美術館「沖縄染織展」の管理及び講演のため同館へ出向
- 12月18日 平安座島の墓及び厨子甕の調査(上江洲、玉城主事)
- 12月25日～1969年1月7日 東京大学の「沖縄の洪積人類」の発掘調査に参加(玉城主事)
- 1969年1月11日 日本社会開発青年奉仕隊に「琉球の文化」について講演(外間主事)
- 1月19日～21日 沖縄本島各地の屋根獅子の調査撮影(大城主事)
- 1月22日～27日 資料購入交渉のため久米島へ出張(上江洲主事)

博物館及び職員の出版物

1. 博物館出版物(政府予算によるもの)

- | | | | |
|----------------|-------|-------------------|-------|
| イ、博物館案内(冊子16頁) | 1962年 | ニ、博物館30年史(28頁) | 1966年 |
| ロ、" " | 1963年 | ホ、博物館々報(44頁) 第一号 | 1968年 |
| ハ、" " | 1963年 | ヘ、鄭元偉扁額寄贈記念誌(23頁) | 1968年 |

2. 職員の論文・著書

主 題	発表年	発 表 者	備 考
琉球の彫刻概観	1955	外 間 正 幸	「沖縄文化史」のうち
ようどれ石棺について	1955	"	琉球新報紙上
ようどれ石棺	1962	"	沖縄タイムス紙上
琉球の梵鐘について	1961	"	文化財要覧
琉球の美術工芸	1961	"	東京宝文館発行の 「郷土の文化財」
琉球文化史年表	1964	大城知善 外間正幸 共 編	
琉球の工芸	1966	外 間 正 幸	著書 淡交社発行 「日本の工芸」別巻

研 究 録

江戸時代琉球使節の音楽と舞踊について

外 間 正 幸

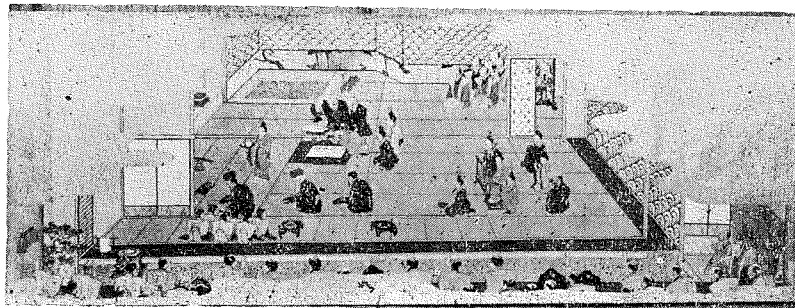
今年は組踊が始めて上演されてから二百五十年にあたるので、標題について書いてみたい。

慶長15年、尚寧王以下百余人の人々が、初めて江戸上りしてから、琉球は將軍の代替りごとに慶賀使として、また国王の即位ごとに謝恩使として、將軍に拝謁するようになった。そして、明治5年までに江戸上りは21回も行われ、毎回七十人余り、多い時は百七、八十人にも及んだ。しかもその半数が芸能人の資格で参加したというから、その間には琉球の音楽と舞踊は相当みがきがかかったことと思う。

音楽は承応2年將軍家綱慶賀の時に初めて奏され、舞踊は越えて寛延元年、將軍家重慶賀の時に初めて演ぜられた。それ以来本格的に琉球の芸能が紹介された。

これらの音楽と舞踊に関する資料としては、現在琉球博物館に天保3年の舞楽絵巻物が二巻ある。いずれも相当長い巻物で詳しく描かれているが、人物や服装、楽器類の描写の相違から、作者は同一人ではない。前の一巻について仲原善忠先生は、謝恩使一行が江戸の薩摩屋敷溪山邸で行なった歌舞で、狩野探信が描いたものと見ておられた。また、後の一巻は池田彌三郎先生から寄贈されたもので、池田先生はその著「芸能」でこの絵巻物について説明され、当時、江戸城内で行われた音楽の曲目を、万年春、賀聖明、楽清朝、感恩沢、福寿歌、慶盛世、鳳凰吟、慶皇朝、硯大平、古囃古囃と十曲あげておられる、この曲目は溪山邸の歌舞次第と少し違っており、さらに承応2年の頃にくらべると、曲目にもっと変化が見られる。

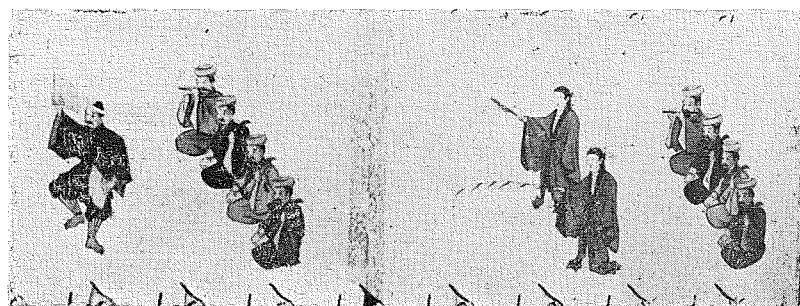
すなわち、池田先生の説明によると「承応2年慶賀使が日光で楽を奏した時は、楽人の組織も簡単で曲目も少なく、六人の童子を含んだ七人の楽人が、三番の音楽を演奏しただけ」となり、また楽の次第も、一番が大平楽（大鼓、銅鑼、二つ鉦ひちりき、無言で奏し、終って退く）二番は万歳楽（大鼓、銅鼓、二つ鉦、ひちりき、微音を発して唱歌す。舞楽にあらず）三番が難来節（大鼓、銅鑼、二つ鉦ひちりき、半笙）となり、三人とも七人ずつ出た」となっている。



江戸の薩摩屋敷溪山邸で演舞の前の楽童子たち

そして、つぎの寛文11年、尚貞王の謝恩使の時は日光参向がこれ以後とり止めとなり、大老酒

井雅楽頭忠清
の邸宅におい
て、家綱の面
前で奏せら
れ、曲目が増
えたという。
それからさら
に次の天和2



江戸の薩摩居敷溪山邸で演ぜられた歌舞

年の時に、初めて城内で奏せられ、このときは楽者も増えたようである。

ところで、これらの音楽については他に詳しい記録がなく、したがって一般にはあまり知られていない。そこで寛政2年（天保3年より凡30年前）宜野湾王子一行が慶賀使として江戸上りした頃、江戸で出版された「琉球談」の中から、音楽について記された部分を見てみたい。

「楽には、大平調（たいへいちゆう）長生苑（ちゆうせいえん）芷蘭香（しらんこう）天孫大平歌（てんそんたいへいのうた）桃花源、揚香、寿導翁、是等の外数曲あり、此内桃花源、揚香は明楽なり、寿導翁は清朝の楽なり、又神歌という物あり、日本の式三番の如く、国楽を奏する始に、一老人の形に打冷（いでたち）揚（ぶたい）に登りつ、此曲を舞ふ。此国混沌のはじめ、世を御したる、神靈天孫氏世々の国王位に登る毎に形を現じて靈祐を示す。すなわち迎神（かみおろし）の歌を製して、もってこれを観樂す。後世にいたりて神しばしば形を形を現ぜず、故に神代より遺りたる唱歌を伝えて、国王即位の時に格別の儀式ある時此曲を行う。神歌を唱ふる間は管弦とともに声を出さずとなん」とあり、明、清の秘曲に合せて神歌が厳肅に奏されている。

一方、舞踊においても音楽と同様に、寛延以来長年の間には相当の変化があっ



天保3年 江戸で上演 小波蔵親雲上

たことと考えられる。すなわち、池田先生の説明によると天保3年の時の舞踊は、団踊摩踊、打組踊、打花鼓、和香、風箏記となっている。これでも全部を紹介されていないので、寛延元年に初めて舞踊が演ぜられた時よりは、ずっと増えていると思われる。

このように舞踊についても

天保3年の頃のは博物館所蔵の絵巻や仲原、池田両先生の説明によっても大方判然するが、それ以前になると今のところはっきりしない。それで、寛政二年に出た「琉球談」の中から舞踊についてみると、まず舞台については、「王宮にて歌舞を挙げる時は、五、六丈四面の舞台を造り、四方に幕を張り、楽人は紅衣緑衣を着し、夫々の巾を戴き、蛇の皮にて張りたる三弦、提琴、笛、小鑼（こどら）鼓などを持って、二行にならびゆるやかに楽譜を歌へば暫く有て階（はし）をりの幔（まく）を褰（かかげ）舞人出るなり」とあり、ついで、八つの舞について各々左記の如く説明されている。

笠 舞

小童四人、朱き襪（くつした）を履き、五色の長き衣を褙（うちかけ）にし、頭に黒皮にして作りたる笠に、朱紐の付たるを戴き、廻旋（まいながら）場（ぶたい）に登り、楽人の方へ向ひて座す。楽人其笠をとり、朱紐（あかひも）を笠の上へ捲（まき）つけてあたふれば、童子うけ取て立上り、足拍子を曲節に合せて舞ふ。此を笠舞という。

花 索 舞

小童四人、金扇子に花を飾りたるを戴き朱帕を為し、五色の衣をいかにも花やかに着為し、五色の花を付たる索の輪に為たるを項（くびすぢ）に懸て場（ぶたい）に登り、其索を手に懸足拍子を踏て舞事、笠舞の如し、これをなづけて花索舞といふ。

籃舞（かごまひ）

小童三人頭に作り花を飾り、錦の半臂（はっぴ）を着し、小き花籃を肩に懸て場に登り、前の如く舞う。籃舞と名づく。

拍 舞

小童四人、五色の衣を着して場に登り、楽工の前に座すれば、楽工銘々小竹拍四片を授く。童子取て立上り拍子を拍て舞う。これを拍舞といふ。



琉球人行列図中の金鼓並に楽隊

武 舞

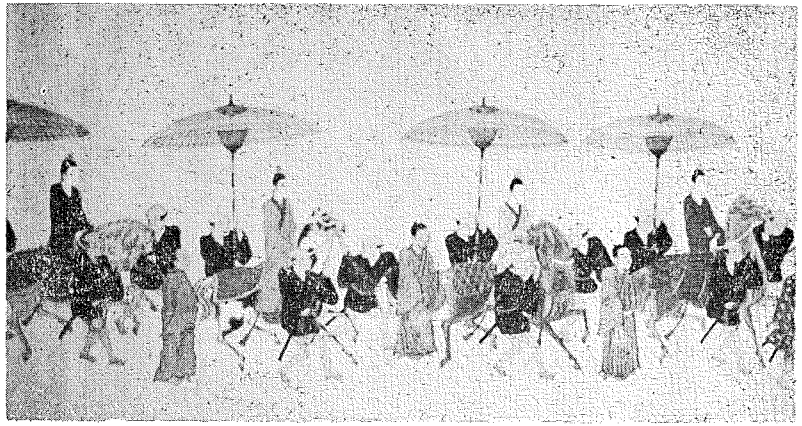
武士六人白黒の綦紋（しま）の袖を大小に仕立たる短き衣を着し、金籀（きんのはちまき）を額に結び白の

枝を突て場に
登り、撃合音
を節に合せて
舞ふ。

武舞と号す。

球 舞

小童二人五色
の服を穿(き
)金の毬の四
面に鈴ををつ



樂童子たち

け、朱き紐の長く付たるを持、左右に立て舞ながら二疋の獅子を引て場に登り獅子を狂わせながら舞ふ。獅子は種々の狂いをなし、其興ある曲なるよし、是を毬舞という。

桿 舞

小童三人さはやかに粧ひて場に登り、樂人より一尺ばかりなる金様(きんだみ)の桿(ぼう)を請取り、交撃(うちあわせ)て舞ふ。此曲を桿舞といふ。

扇曲、掌節曲

小童四人、手に三尺ばかりの竿に花の付たるを各一本宛たづさえて舞ふを竿舞といふ。此外舞には扇曲(あふぎのきよく)童子六人にて舞ふ、掌節曲(てびようしのきよく)小童三人にて舞ふ。以上。これからみると、当時の樂人は皆舞台の面前に姿を現わし、樂人の譜に合せて舞人が踊っており、樂人が相当重要な位置にあったことがうかがえる。また踊りは大方樂童子は士族の容姿端麗な少年の中から選ばれており、馬上の美少年がそのあで姿である。

当時の江戸上りは、美美的行列をつらねて江戸城へ参向したため、江戸市民の視聴を集めたという。その上いろいろの出版物が売出され、わけても樂童子については、「これ大かたは美少年なり、十四才より十六才迄、唐織のかぎりなき美服を着す。すべて琉球高貴の人の若となり、雲上の席にて座樂をつとむ。わけて音律にくわし、皆能書にして、かたわら詩歌をよくす」と書かれている。そのため江戸市中の女たちが、樂童子を見ようとおしかけ方々で大へんな混雑をきわめたという。

つぎに、これらの舞樂を演ずる人たちの役割りが慶賀使の任務の上で非常に重要であったため、江戸上りの道中、他の面々にくらべて特に優遇されていたことが、当時の行列図からもうかがえる。いまこれを天保三年慶賀使(正使豊見城王子)の行列図によってみると、琉球人凡二百人の中、舞樂に直接関係する人たち

が、凡三十人もしめている。

この行列は薩摩藩土の指揮で江戸までつれて行かれたので、薩摩側の人員は凡一万人を越え、そのほかに薩摩の方から人足凡そ二千人、馬凡八百疋も出されたという。これだけ大勢の人々が、なれない気候の中を鹿児島から江戸まで四百里の行程を徒歩で行くので、道中落伍者が出ぬよう、特に舞楽の人たちには薩摩の方でも気を配ったことと思う。

先ず先頭から順序に、先はらひ、警固、弓、旗竿、長柄、奉行、騎馬、先馬、具足、弓、對箱、對鎗、中鎚、立傘、台傘、徒士、刀筒、長刀、小性、御家老、鎗、對箱、茶弁当、引馬、押、楽器箱、書翰箱、鞭、牌、張旗、鑼銅両班、哨吶、喇叭、銅角、鼓、虎旗、三司官、冷傘、龍刀、正使使贊、跟伴（供人）数人、轎（正使が乗る）跟伴数人、立傘、鎗、正使使贊、讚議官、正使付役人、鎗、楽童子、楽師、楽正、龍刀、副使、副使使贊、傘、鎗、議衛正、跟伴数人、掌翰使、贊渡使、醫師、讚議官従者、楽正、正使小性、路次楽人となっている。

この行列図でみると、先頭の先はらひや警固から二十四、五番目の茶辨当や押持ちまでの百余人はすべて薩摩人で、その次の楽器箱担ぎから琉球人になっている。そして、薩摩人でも籠に乗っているのは御家老だけ、馬乗の人は奉行一人だけである。

楽器箱は二人で担ぎ、箱には金泥で楽器と書いた札を立ててある。その次に書翰箱や鞭を持った人がならび、その後に謝恩使、中山王府と書いた二行の牌を持った人が並んでいる。それから金鼓と書いた大きな旗が二旗並び、その後から銅鑼や鼓の楽人十二人が路次楽を奏し、さらに正使付役人の後に六人の楽童子（登川里之子、譜久村里之子、浜元里之子、宇地原里之子、富永里之子、小祿里之子）が各々従者をつけて馬に乗っている。

琉球側も正使は轎に、副使と醫師は籠に乗せ（いずれも籠担ぎは薩摩の人）馬上の人は楽童人の外には三司官、讚議官、楽正、議衛正、掌翰使の六人だけである。面白いことに楽童子は五人の楽師（富山親雲上、池城親雲上、具志川親雲上、内間親雲上、城間親雲上）らよりも優遇され、楽正（伊舎堂親雲上で楽人の頭役）や議衛正（儀間親雲上で路次楽奉行）と同様に馬をあてがわれている。そして楽童子の衣装は他にくらべて一段ときらびやかである。

このときの音楽の次第は、大平調（たいひんちよう）桃花源（とうふあえん）不老仙（ふうすせん）が楽人各々七人宛掲香（やんひやん、明曲舞人二人）寿尊扇（ちゆうふんおん清曲舞人二人）長生苑（ちやんすえん）芷蘭香（つうおんひやう）が舞人各々七人宛、寿星老（ちゆうすいんちやう）、明曲舞人七人）正月（ちんいえん清曲舞人七人）となり、右楽は道中宿に出立の折または日中行列の中、亦宿着などの節にもなす事あり、舞は席上にてのことなり、路次にてはなしとされている。

以上、江戸時代琉球の音楽と舞踊について当館所蔵の絵巻や軸物の紹介をかね

て「琉球談」からとりあげてみた。ところで琉球使節の来朝ごとに江戸では、ぬけ目のない出版屋たちが「琉球人行列記」や「琉球年代記」などいろいろの出版物を売出し、中には非常に滑稽な行列図も見られる。そして、「琉球談」もこのような時期に出版されているので、この本の中の音楽や舞踊の説明が正確か否かについては、今後、内外の専門家の考証をまたねばならぬだろう。

しかし、いずれにしても私はこの本の著者森島中良が、当時「琉球談」のほか「朝鮮談」「万国新話」「西洋奇談」「日本地名便覧」など十数冊の本を出したというのからみて、彼は相当豊富な資料を集めていたにちがいないと思う。その意味でこれらの舞楽の記述は、当時の資料に基いたものとして琉球の舞楽を見る上で、絵巻と同様に貴重なものと云えると思う。

なお、名古屋の徳川美術館には、江戸上りの際に使用された琉球楽器が完全に一揃保存されている。この楽器は寛政10年(1798)江戸上りの帰途尾洲侯の面前で演奏し、このとき演奏の記念として一揃献上したものといわれる。それだけに現存の琉球舞楽の資料としては最も確実なものと思うので簡単に記しておきたい。すなわち、当時の演奏と唱曲を尾洲家の記録によると、奏楽には万年春(哨呐、鼓、管、銅羅等)楽清朝(笛、鼓、小銅羅、板等)賀聖朝(哨呐、鼓、板、銅羅)唱曲には福寿頌(琵琶、三絃)大平頌(夜雨琴、三絃、打彈子)鳳凰吟(笛、鼓、小銅羅、槌板)新年曲には四絃、鼓、小銅羅、胡琴、弓等となり、これらを奏する楽器類は大きな長持の楽器箱に格納されている。

昨春私はこの黒塗りの琉球製長持の楽器箱と楽器の数々を、東京の白木屋で拝観したが、いずれも貴重な資料であり、同時に美術品としても価値高いものであった。いまここに楽器の名称だけ記しておこう。鼓(クウ)銅羅(トンロウ)新心(トンロウ)新心(スイシン)横笛(ホンチヨウ)管(カン)長線(チャンスエン)琵琶(ヒイハア)三線(サンスエン)月琴(イヨウキン)小銅羅(シヨウ

トンロウ)両班(リヨウハン)三金(サンキン)三板(サンハン)哨呐(ツオナ)四線(スウスエン)胡琴(フウキン)二線(ルスエン)弓子(キユンツウ)夜雨琴(ヤウキン)

代上



天保3年 江戸で上演

楽童子 登川里之子

1969年3月28日

琉球の唐獅子雌雄考

(彫刻を中心として)

大城 精 徳

琉球における唐獅子の雌雄について考察を進める前に、当然順序として琉球の唐獅子の由来、意義、素材や様式、あるいはその芸術的価値等についてくわしく触れるべきであるが、内容が龐大で、しかも多岐にわたり、紙面の都合もあってここではそのほとんどを割愛した。これらについては他日稿を改めて検討を加える計画である。以上のような理由で本稿ではもっぱら考察の焦点を琉球の唐獅子における雌雄の別ということにしぼってみた。また、この稿をおこすにいたった動機は、唐獅子の雌雄について、これまでいく度か論議という程ではないにしても一般的な疑義がもたれ、未だ結論が得られないまゝであるということにある。この疑義は学問上のものではないが、特に沖縄の獅子彫刻においてはこのような疑義がもたれるだけの理由があったということだけをここでは指摘しておこう。その論議の焦点になっている獅子彫刻というのは、対としてつくられた獅子像についてで、その一は開口し、他の一は閉口しているが、そのどちらが牡で、どちらが牝かということである。獅子は生物学上、その雌雄の形態、つまり牡獅子にはたてがみがあり、牝獅子にはそれが無いことははっきりしており、それにしたがえば問題は介在しないことはいうまでもない。だが、琉球の獅子彫刻を調査してみると、このような生物学上の外貌にかかわりなく、たしかに雌雄を意識して製作した一時期があったと思われるふしがあるのである。これと開口、閉口の形態がどのように結びつくかという点がこの小論のテーマであり、また核心なのである。

これまで筆者が調査してきた獅子像は、屋根獅子も含めて百数十例である。これらを通して琉球の獅子彫刻をみると、その素材が豊富であるばかりでなく様式や用途も実に多様で、しかも独特の形態をもち、おそらく世界のどこの国にも沖縄のように獅子が用いられた国はないとさえいえるほどである。ここではこのテーマと直接のつながりはないが、その総体を把握してもらう意味でその様式の大まかな分類をやってみた。それはおよそつぎのようなものである。

第一は、中国の宋の様式をくむもので、比較的口巾が広く、口部が角張ったところに特徴がある。その代表的なものは円覚寺放生橋の勾欄羽目石の浮彫や同支柱上の獅子百態、あるいは村芝居の獅子舞の獅子頭等である。

第二は、明の様式の流れをくむものである。その特徴は口部がややまるみを帯び、口巾が比較的せまいという点にある。壺屋でつくられる陶製の置獅子や、印章のつまみ代わりに彫られた獅子像等にみられる様式がこれにあたる。屋根獅子も大ていはこの様式を基盤にしたものと考えられよう。

第三は、前二者を土台にしたものであるが、そのどちらにも属さず、まったく

沖縄独特のもので、よくその民族性を反映させたものである。これは元来の獅子像の概念からは可成り遠のいて、空想の中から生まれた動物像のような形態をもつにいたっている。その典型は首里玉陵岩上の獅子や未吉宮の獅子像等であろう。

沖縄の唐獅子は大体以上の三つの様式に分類出来ると思うが、こゝで明様式と宋様式といっても、それをそのまま採用しているという意味ではなく、この系統の獅子像にも沖縄ならではみられない多くの要素が含まれていることはいうまでもない。

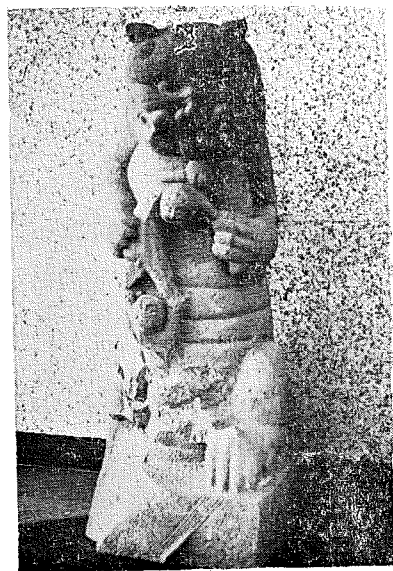
以上は様式上の分類であるが、これらの獅子像には、用いる場所によって、さらにいくつかの形式がある。すなわち対の場合と、一軀だけの場合と、群像の場合である。何れも二、三の特例を除けば、多かれ少なかれ、降魔除災の守護神として用いられたものである。なかでも一軀独立して用いられたものはこの意義が比較的濃厚であるようにみうけられる。最も変化に富む屋根獅子がそれであり、また部落の魔除け獅子もこれに属する。これらは庶民の生活の中に多くみられるもので、アルカイックな美しさを具備し、きわめて親しみ深いものがある。

対でつくられた獅子は貴族の生活の中から生まれたものが多く、王陵や城門、あるいは社寺の門前等に据えられ、守護と装飾を兼ねたものである。壺屋でつくられている陶製の置獅子等もこの部類に属する。この形式で用いられる獅子像は魔除けというより、装飾的な意義にウエイトがおかれ、可成り高い芸術的な次元にまで高められたものが多い。そして前にも触れた通り、これが本論の主役である。

群像の形式は首里玉陵の墓前石欄支柱と円覚寺放生橋勾欄支柱上の獅子群のみで、その例は多くはない。

では、対でつくられた獅子像が二、三の例外を除いて、時代や様式の如何にかかわらず、一は開口し、他の一は閉口した形態でつくられているということは元来どのような意義をもつものであろうか。その原点に戻って考えてみよう。

獅子が世界の美術史の上に登上してくるのはきわめて古く、その発祥はだいたい紀元前10世紀を前後する頃で、エジプトやイラン、イラクそれに時代はやや下るがインド等である。これらの地方は何れも実際にライオンが棲息するか又は棲息地に隣接する国々である。したがってこれらの国々でつくられた獅子像には、するどい観察の上にたった確かな写実がうかがわれる。特にアツシリヤの獅子にはその意味ですぐれたものがある。ここではたてがみのある牝獅子と、たてがみのない牝獅子はきわめて的確に



首里玉陵岩上獅子
政府立博物館蔵

表現されており、この事実から推して、その雌雄の区別も明確であったことがうかがわれる。①しかし獅子像といえばたてがみのある牡獅子をもってそれを表わしたものが圧倒的に多いということは勿論である。

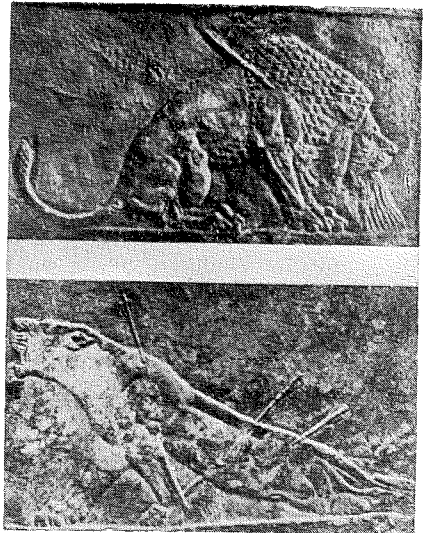
(①写真参照)

インドはアジャ種のライオンの棲息地として知られているが、インド美術史の中に獅子が登上してくるのは紀元前3世紀頃のように、その代表的なものはアソカ王が国境に沿って建てたといわれる石柱群の柱頭上の獅子像である。

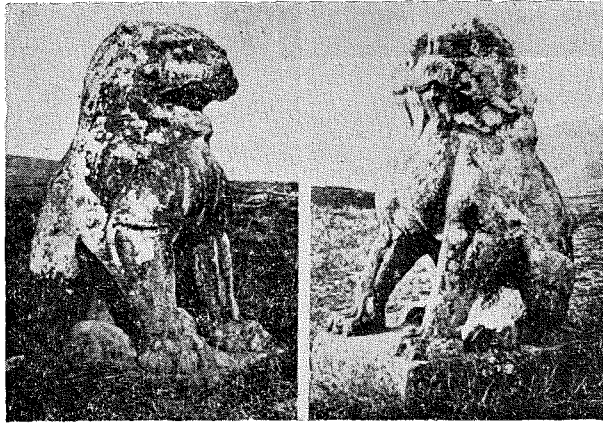
獅子、特に牡獅子はその相貌堂々として雄豪の気魄に充ちているため、これが権威の象徴として用いられるようになったことはごく自然の成りゆきといえよう。これらの地域における獅子像も王宮や神殿建築、又は貴族の装身具(工芸美術)等に多く用いられ、装飾と守護を兼ねていることは後代の東アジャに於ける獅子の用途と同じである。その組合わせの形式も一軀物、対物、群像と多様であるが、対物における開口、閉口の様式化はまだみられない。殆んど開口した、いわゆる獅子吼の形態で表現されているのが普通である。

これらの地域から獅子彫刻が中国に入って来たのはいつごろか、手もとに正確な記録はないが、現存する2、3の例から推してだいたい1、2世紀頃(後漢時代)に西域を軽て伝わったのではないかと考えられる。現存する古い例の一つに山東省嘉祥県の武氏祠石獅子が知られており、これは西歴147年の作となっている。支那では主として皇帝の陵墓の前に一對据えられ、その守護神として用いられているが、後代になると装飾用の置獅子等も数多くつくられたらしい。そして中国に入って来てから始めて開口、閉口の形態が現われてくるのである。もっともこれは可成り後代になってからではある。その代表的なものが陝西省涇陽県にある唐の「徳宗」崇陵の一對の石獅子であろう。(②写真参照)

これは唐代芸術の精髓を發揮したものだといわれているが、ここで注目したいのは、この一對の石獅子にはいづれもたてがみがあり、外貌は立派に牡獅子だということである。ということはこの一對における開口、閉口の姿態は必ずしも、その雌雄とは関係がないといえるということである。だとすればこの開口、閉口の形態は何を意味しているのだろうか。手もとにあるいくつかの資料を調べてみると、それは密教における一切諸法の「初」と「終」を意味する「阿吽」(アウン)を表現したものであることにだいたい一致している。密教においては「阿」



① アッシリヤの獅子
傷つける牡獅子
傷つける牡獅子



②唐「徳宗」崇陵石子

は万有発生の理体であり「吽」は万有帰着の知徳であるとするは衆知のごとくである。寺院の正門に安置してある仁王像（全剛力士像）もこの義を現わしたものだといわれ、やはりその一体は開口し他の一体は閉口している。そして「阿吽像」という別名をもっている。仁王像は元来一体であったものが門にたつようになってから二体になり、造型の上からこれを開口閉口の両形に分けたといわれている。これは造型上の必然的な形態としてみるばかりでなく、密教における阿吽の義と結合したものだともみるのが穏当であろう。獅子像の場合もおそらくこれに順ずるもので、まったく無関係ではあるまい。

密教は6世紀頃インドに起こり、中国へ伝来したのは8世紀の初頭で唐中期にあたる。前述の視点にたつと、獅子像における阿吽の形態もおそらくそれ以後あらわれたものであるといえよう。前にあげた唐の徳宗（780～804）崇陵石獅子は中国に密教がたつたえられてからおよそ2世紀後につくられたもので、当然この密教の影響を受けたものとして考えるのに無理はないと思う。唐代に起つたこの形態がずっと後代まで踏襲され、さらにその文化の影響下にあった周辺諸国にもたつたえられたことは推察にかたくない。

記録がないのでいつ頃沖縄に入ってきたかはさだかでないが、中国と積極的なつながりをもちはじめた察度王代（1350～1395）ではないだろうか。これについての詳しい考証は後日にゆずるとして、ここでは現存する獅子像にスポットをあてながら考察を進めてみよう。

現存するものの中で時代的に最も古いと考えられるものに浦添ゆうどれの英祖王陵内の石棺にみられる浮彫獅子や、未吉宮の一对の石獅子がある。特にゆうどれ石棺の屋根の隅陳上の獅子彫刻は琉球における屋根獅子の祖型ともいえるべきもので、きわめて興味深いものがある。しかし浦添ゆうどれの石棺については、その年代設定をめぐる研究家の間で論議が交わされ、いまのところ断定はくたせない状況である。ただ、どちらの説も15世紀以降ではなく、それが古いものの一つであることにちがいはない。その一説は、石棺も墓陵と共に古いとする説で、これに縦えば1264年といことになる。つまり、僧禅鑑が極楽山に寺を建て、その近くに墓を造つたという年代である。他の一説は、これを尚真王時代（1477～1526）の作とする説である。これは歴史、考古、美術（彫刻、建築）等多角的な面から考証を行つた説で、おおかたの研究家がこの説を支持している。

末吉宮の一对の獅子もその明確な製作年代は不明であるけれども、宮の創建の際据えられたものであるとすれば尚泰久王代（1454～1460）ということになる。

琉球で最も多く獅子像が製作された時代は15世紀後半から16世紀初頭に及ぶおよそ半世紀間で、前述の尚真王時代にあたる。この時代の獅子像は、その数が多いというだけでなく、様式や形態もきわめて多様で、いま思い出すままにそれを列挙してみても、首里玉陵の獅子群、円覚寺放生橋や殿内の獅子群、首里城歓会門や瑞泉門の獅子、それに他の王家陵や、著名な御拝領墓内の石棺の彫子浮彫や彫刻等大変な数にのぼる。さきのゆうどれの石棺もこれに含めると百花爛漫というところであろう。これらの獅子像がまったく忽然とこの時代に集中して現われたものではなかろう。少なくともこれに先行する時代に、それを生む素地が十分に準備されていたと考えるのが自然であろう。石彫というのは、その素材の性質上、いかなる条件の下でも大体は後世まで残されるということを見ると、これより古い獅子像がそれほど多く残されていないのは、おそらく他の素材、例えば木彫とか、あるいは紙や布に描かれたものであったためではないだろうか。尚真王以前に既に多くの仏寺や社殿が創建されており、これに伴う獅子彫刻がなかったとはいえない。



③ 円覚寺放生橋勾欄支柱上の獅子

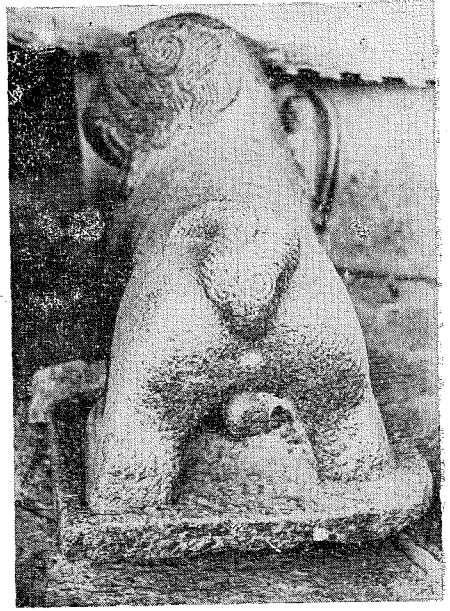
尚真王時代というのは琉球文化がはなやかに開花した時代で、これに伴って獅子芸術もそのピークをしるした時代である。特に獅子彫刻における沖縄独特の様式が生み出されたのもこの時代なのである。

これらの特質やすぐれた点は首里玉陵墓岩上の獅子や円覚寺放生橋の獅子群に遺憾なく発揮されていると思う。その一端を放生橋の獅子にのぞいてみよう。この勾欄の素材は閃緑岩で、左右羽目の両面には、二対の争珠の獅子像を始め、花や他の動物を浮彫し、8本の支柱の頂きには、それぞれ獅子の彫刻が刻まれている。これらの獅子の様式は大体明の流れをくむものではあるが、ポーズや表情には全く沖縄独特のものがある。左側の4軀は子獅子を愛撫し、右側の4軀は珠とじゃれている姿態で、それはいかにも満腹した獅子が、温かい陽差しの下でくつろいでいるかのようであり、またその表情は柔和で、しかも子獅子を愛撫しているほう

はかすかに微笑さえうかべているのである。そこにはたくまざるユーモアが溢れている。世界のどこの国に獅子をこのように（微笑をもって）表現している国があるだろうか。（③写真参照）このような特質は放生橋の獅子に限ったことではない。この時代につくられた獅子像のほとんどにみられるものなのである。

この時代につくられた獅子像の大部分は対の形式をとっている。これにもまた二つの形式があって、その一つは争珠の獅子像で、これは一对の獅子が紐の付い

た珠をうばい合っている形式で表わされている。何れも紐をくわえて固く口を閉ざし、開口の形態はみられない、これは前述の放生橋勾欄羽目の二対の獅子像を始め王家陵や著名な御拝領墓内の大石棺に施こされた獅子浮彫にみられる形式である。他の一つは、いわゆる開口、閉口の阿吽獅子である。この時代の阿吽獅子は、元来の形に更に造形の上から一步進めた点が特徴である。つまり開口の獅子は子獅子を愛撫するポーズで現わし、閉口の獅子には珠を配して、その紐を固くくわえてじゃれている姿で表現しているということである。この様式は中国では明時代に現われたものだと聞いている。末吉宮の獅子、首里玉陵岩上の獅子、放生橋支柱上の獅子、尚寧王陵の岩上獅子等いづれもこの形態のものである。ここで今一つ最も注目すべき点は、珠紐をくわえて、固く口を閉ざしている獅子像に牡の性器までつくってあるという



④ 首里末吉社だんの獅子

ことである。(④写真参照)末吉宮の獅子や放生橋欄干支柱上の獅子がそれである。

これは明らかに当時の製作者達が、その雌雄を意識してつくったものであるということを立派に証しているといえよう。獅子を実際に見たことのない当時の人達が、牡獅子にはたてがみがあり、牝獅子にはそれがないなどという知識がある筈がない。たてがみの有無にかかわらず、開口閉口の形態を更に陰陽説等と結びつけ、そこから雌雄の概念が自然に生まれてきたのではあるまいか。

尚真王時代に対でつくられた獅子のなかで、ただ一對だけ特例がある。首里城徽会門の獅子で、二軀とも開口しているのが他に見られない形態である。第二門の瑞泉門の獅子が、ちゃんと阿吽像になっているところを見ると、これは正門（大手門）というものに対する極めて微妙な宗教的配慮から出た形態ではないかと考えられる。つまり縁起である。

ともあれ、これまでの考察を通して結論としていえることは、獅子芸術における開口閉口の形態は、支那唐代に始まり、元来密教における阿吽の義を現わしたもので、その雌雄とは全く関係がなかったということであろう。しかし、琉球では、前述のごとく、ある時代にはその区別が明確にあったということである。ただ、後代になっても果して雌雄の意識をもってつくったかということになると、その具体例にめぐりあっていないので何ともいえない。壺屋などでは古い時代からのいい伝えとして、開口したのが雄、閉口したのは雌ということになっているらしいが、これはおそらく、開口したものが男性的で威勢がよいところから、俗に生まれた概念ではないだろうか。ここで強いてそれのみに限定して雌雄を決するならば、壺屋につたわるいいつたえとは逆に口を閉ざしたのが牡獅子で、口を開けたのが牝獅子だということになる。

知花の祭祀とその組織

上 江 洲 均

1 はじめに

美里村知花は、コザ市から石川市に通じる道に嘉手納村から具志川市方面への道が交差し、地理的な要衝の地として、また知花焼の古窯跡として、さらにその昔は鬼大城（大城賢雄）の終焉の地として知られている。

この部落で、数年前ノロ継承をめぐる一悶着があったとはいえ、それとはうらはらに神事は衰微する一方である。それは各門中から出るクディングゥ（単にクデ・オクデともいう）の後継者が出なくなっている現象を見てもうなずけることである。

1965年から4年間、この部落の旧5月、6月のウマチー（稲穂祭と稲大祭）を見学したが、その間に神人をやめた者、死亡した者、登川のように2人のウミインカを出さず、一行を部落へ招待するのを取りやめた例などがあった。

ここでは考察ではなく、わずかばかりの見聞をもとにした記録にとどめる。

2 古い家系

部落には数軒の古い家がある。^(註1)門中の宗家でムートヤー（元家）と呼ばれるものである。これらの家には、仏壇以外に神御棚があり、そこには2基ない3基の香炉がある。この神御棚は大ムート、中ムートと呼ばれる特定の家にのみあるもので、1つの香炉には2人のクデがいて、これを通して祖神をまつるのである。^(註2)クデはすべて女性であるが、2人のうち1人は兄弟役のウミキイ神、一方は姉妹役でウミナイ神といい、これを一組の夫婦に見立ててミートゥンダ神と呼ぶ。それは、「33年忌をすませた祖先が男女おのおの2柱の神となり、それぞれを門中のウナイオクデ、ウィキーオクデの2人がまつる」^(註3)とする説明に合致している。

クデはほとんど何らかの起縁でなった者である。若い頃頭痛持ちだったとか、産後病気がちだったとかで軽重の差はあれ神ダ^(註4)ーリがあったようである。あるいは夢に知らせがあったりなどで元家の香炉を拜むようになった例は多い。

クデが拜むべき対象は祖先神であろうが、「ほとんどの場合、それは〈アジシー〉と呼ばれる古い墓であり、各〈クディングゥ〉は自己の対象の墓の位置をわきまえ、通常本家の神棚にある香炉を通して拜むのである。いいかえれば、ある〈ハラ〉において、その祖先の墓の数に応じて、神棚に香炉がおかれ、その香炉の数は〈ハラ〉の〈クディングゥ〉の数を反映していると考えられる」^(註5)の内容とは多少の違いがある。

というのは中部以北は首里那覇、島尻一帯に比べ「ハラ」の組織が稀薄であるということ。それはまた墓制とも関連があって、知花部落には門中墓なるものがあるにはあるが、実際には「村墓」^(註6)的存在であること。したがって各元家の香炉の数は、必ずしもその祖先の墓の数に一致していないだろうし、図示できるものではない。

元家を中心に各門中で行なう行事としては、3年越し、7年越しと定期的な島尻の東御廻り、首里上り、今帰仁上りや遠くは辺土名へ拜みに行く家もあれば、石川伊波の旧家を拜みに行く家もある。それに5、6月のウマチー、8、9月頃のカーメー（古井泉詣）もまた大きな行事に数えられる。

知花は昔北方の山中、福地原という所に部落があったと言われている。それについて次のような言い伝えがある。大村渠、中大屋、メンナーカの三家の先祖が知花へ来て炭を焼いていた。雨が降り、ワントンジャーを渡れなかったので、この地に家を建てたのが移動のはじまりだと。最初移動した時、現在のヌンドンチ（ノロ殿内）の周辺に住んでいたが、松本が南の方へ移動し、そのあとへ移ったのが現在地であるとの説もある。また鬼大城の最期を遂げた時の話に、知花城の前には7軒の家があって、その家の茅で鬼大城をいぶした話がある。その7軒というのが大村渠村であったといい、屋号大村渠はその頃からの屋敷だとしている。

しかし「南島風土記」によると、美里間切が知花等15村を越来間切から割いてできたのが寛文6年（1666年）であるが、その中に大村渠の名は出てこない。後になって「大村渠、満喜世、渡口、古謝、桃原の五村を新設し、その後大村渠、満喜世、二村を廃して松本を置き」とあるのからして、前記の7軒の大村渠云々は、時代的に大きなずれがあり疑わしい。

2、3の元家は読谷村長浜あたりに子孫を持ち、ウマチーにはクデがやって来た。池原、登川、松本からもクデが出、共通の祖先を拜むのである。大村渠は元家の中でも一番古いといわれ、知花、池原、登川、松本に300人ばかり、読谷にまたそれくらいの氏子を有しているといわれる。クデは直接大モトから出ることもあれば、中モトを介してやって来ることもある。読谷や池原に知花屋と呼ばれる中モトがあるのなど、この部落との関係を物語るものであろう。クデの中には、遠く伊計島に嫁いだ者がやって来ることもあった。ふつう朔日、15日も香炉を拜むべきだとしているが、遠い関係で家の者が代行した。クデが元家の各自の香炉を拜む前に火の神をまず先に拜むべきだとしている点も興味深いことである。

先程、知花の古島、福地原のことを述べたが、カーメーの時にしえの2つの
ンブガー^(註7)（産井）を拜みに行く。もっとも現在は米軍施設内にあるため、ある門中はトゥヌで、ある門中は池原の井戸からそれぞれお通ししている。琉大法文学部の仲松弥秀教授のご調査によれば、祭のたびにトゥヌで遙拜があった。これに

よって大昔の村位置を知ることができるという。^(註8)

クデについていま少し述べることにする。後継ぎのクデの出ることを「生れる」といい、その年を基準に誕生祝、3年7年と33年までの祝いがある。その祝いは元家の神御棚の前で門中の人々がやる。クデ死亡の時は、葬式を出す前に使いが来てこの家の火の神を拝み、クデの拜んでいた香炉を拜んで「ヌヅファ」をする。^(註9) 拜む人は酒と花米を持参し、来る時は門から入るが、帰りはこっそり裏から出ることになっている。そしてよい年を選んでこのクデの年忌祭を門中で行ない、後継者の出るのを待つのである。

クデはまつりの時の神衣裳を各自の元家にあずける。そしてウミナイ神はまつりに参加するという家が大方である。ところが、大村渠では違う。3基の香炉のうち、右側を拜むウミキイ、ウミナイ2人は家に残り、あとの4人はまつりに出ることになっている。4人のうち2人はウミキイなのである。家に残る2人のことをウヤガニーと呼び、これは「神拜み」に来る氏子と祖神との仲介をする役目である。

3 祭場と神職

「琉球国由来記」を見ると、知花にはカナ森、森山嶽、カナヒヤンノ嶽の3つの御嶽があるが、仲松教授によれば「森山」は単なる森ではなく、久高島のムーヤマと同様「喪山」、つまり古墳地帯を意味するらしく、知花グシクの西北方にある。ヌンドンチの後方の森の御嶽は、ふつう「ニシムイ」または「ノロウタキ」といわれるが、由来記でいう「カナ森」にあたるか「カナヒヤンノ嶽」のいずれに当るか詳らかでない。

「おもろさうし巻二」中城越来のおもろ に次のような「おもろ」がある。

ちばな、かなくすく (知花金ぐすく)

ちばな、いしくすく (知花石ぐすく)

ももしま、まじうんいしくすく (百々島共にいしくすく)

又けおのゆかるひに (今日のよき日に)

けおのきやかるひに (今日の輝く日に)

ちばな、こしたけに (知花こし岳に)

あんは、かみ、てずら (我は、神をまつらん)

かみや、あんまぶれ (神は我を守りたまえ)

又ちばな、にしたけに (知花北岳に)

これからすると、「かなくすく、いしくすく」は知花城であり、「こしたけ、にしたけ」はヌンドンチ後方のニシムイであろうことは想像がつく。由来記で神



① 知花区長から盃を受けるウッチヌアンシー（1967年写す）

名を池原の「イノ森」も含めて4ヶ所とも「イシの御イベ」で片づけているのがあいまいにした原因である。

この御嶽のほかには知花之殿、石城之殿、登川之殿、池原之殿が由来記に出ている。

(註10)

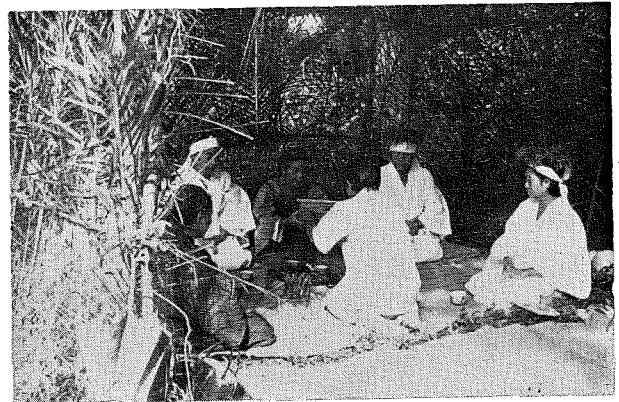
「殿」はこの部落では「トゥヌ」と発音し、知花グシクの北方ふもと下の方に知花のト

ゥヌ、上に松本のトゥヌがある。これは俗に下のトゥヌ、上のトゥヌと呼ばれることもある。由来記の「知花之殿」が「知花地頭云々」が見えるのに対し、「石城之殿」が「大村渠地頭」「大村渠百姓中」があるのからして、前者は知花トゥヌ、後者は松本ドゥヌであることが容易にうなずける。5、6月のウマチーの時、この両トゥヌと登川池原のトゥヌを拜むのである。松本ドゥヌは石の小祠があるのに対し、知花ドゥヌは何もない。まつりの度にここに「神サギ屋」をにわかにしつらえる。

(註11)

美里間切には伊波、東恩納、知花、美里の4ノロがいた。そのうち知花ノロの管轄は知花、登川、池原、松本の4部落である。その下には各元家から出るクデがいるが、部落から出るウッチヌアンシー、サンナーアーシー（この方は登川）がおり、男 神人としてはチハナクの当主が世襲するミツチュがおり、他に8人のウムイシンカがいる。ウッチヌアンシー、サンナーアーシーの任期は4年である。そのほか、まつりの時だけ部落から臨時に村アンシーというのが2人出る。これは接待係で、理由は知らぬが、結婚して間もない女性をえらぶことになっている。

ノロやミツチュ、ウッチヌアンシーが部落行事—たとえば虫あそびや12月24日の煤払い、タキマー(嶽詣で)等に関与するのに対し、クデはもっぱら門中の行事にのみ関係する。5、6のウマチーは勿論部落的な規模で行なわれる行事であるが、同時に門中行事としての性格も濃厚である。クデの下で働くウマーイーやニブ取りなども同様のことが云える。



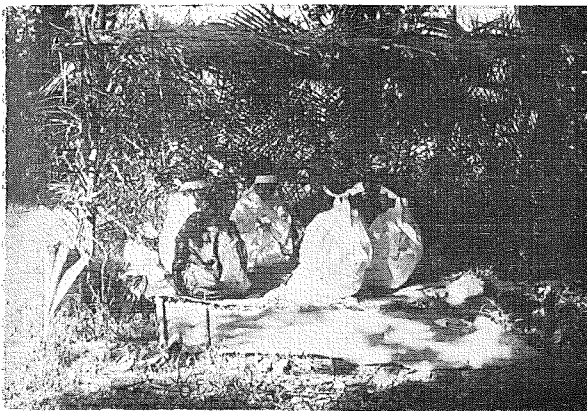
② ウッチヌアンシーがチチン（小太鼓）をさずける。（1965年）

4 まつりの経過

まつりは13日の午後ウンサク（神酒）の米を浸す時から始まる。その時から堆肥のあつかい、針仕事などは忌まれている。

5月、6月のウマチーは互いにまつりの方法は似ている。ただ異なるのは、5月には神に供えるシロマシが出る点である。これはノロ地から採集した稻穂（未熟米）をつついた汁である。この田のことをシロマシ田とも呼んだそうである。5月ウマチーには、各家庭とも稻穂2本、粟穂1本の計3本トヌへ出し、後で持ち帰って台所の火の神に供えた。5月ウマチーは稻穂の豊饒祈願であり、物忌みの要素がより濃い。まつりの時、チデン（小太鼓）もこの時は飾るだけで叩かない。6月はにぎやかに叩き、そのへんが大きな相違になっている。

ウンサクをつくるため浸した米は、翌14日石臼でひき、一晚おいて15日に手を加えて仕上げた。現在は13日ご飯を炊き、容器に入れて密閉し、15日に製粉機に



③ 神サギ屋での神人のウムイ（1965年）

かけてつくる。

14日の晩は各家庭でウユミ（祖先をまつる）がある。クデは各自の元家へ豆腐もしくはソーメン等を持参し、家族と夕飯を共にする。

これより先、午後まだ明るいうちにクデたちは各自の元家で火の神、神御棚の香炉を拜み、ヌンドンチの後のニシムイへ行

き、まつりに頭に被るカーブヤー（三味線づるでつくる）を取る。さらにスキアザカ（琉球青木）の葉など三種の草木の葉を取る。その時お嶽の入口でうたうウムイ。

たきがくまむとに（お嶽のふもとに）
くばの木や植えとて（クバの木を植えて）
しみじみの御めえに（隅々の神様に）
みおうじ取てええしら（御扇を作ってさし上げましょう）

たきがくまむとに（御嶽のふもとに）
松の木や植えとて（松の木を植えて）
しみじみの御前に（隅々の神様に）

あかし取てええしら (灯をつくってあげましょう)

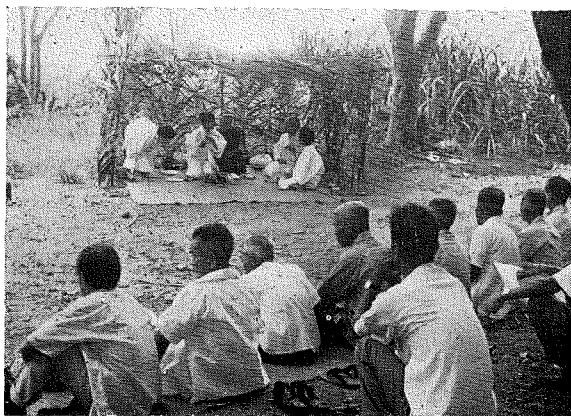
儀式がすんで帰ると二度と入れない。

15日の午後、神人は元家へ行き、各自の衣裳を受け取り、ヌンドンチで待機する。ヌンドンチの屋敷外にユナガーという古泉があり、ここで神人は手足をそそぎ、林の中をヌンドンチへ行った。ウッチヌアンシー、サンナーアーシーは白衣裳は着ず、紺地の着物でカーブヤーも被らない。ニッチュも紺地である。ヌンドンチは一番座の正面にノロ仏壇があり、その東側に神御棚がある。神人たちはこの座敷で神衣裳に着がえる。

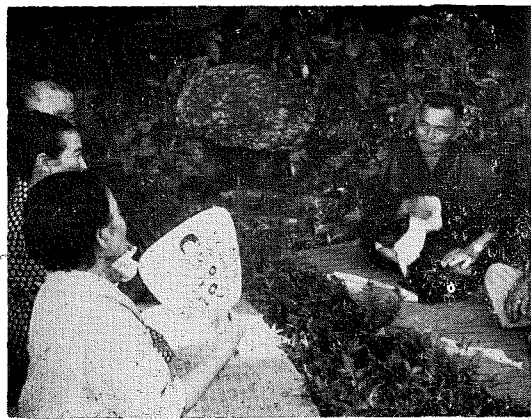
下のトゥヌ (知花トゥヌ) には神サギ屋が出来ている。三方の壁と屋根をマーニ (黒つぐ) で葺かれている。この小屋の前で神人たちがアザカ等三種の草木の葉を2枚表合わせに7組ずつまとめ、葉のもとをそろえて結ぶ (名称不詳)。神サギ屋の前やや斜めにニッチュを頭にウムイシンカが坐る。知花、登川、池原、松本の順序である。末席の2人 (松本と池原からの2人) はチデン打ちである。

儀式のはじめは、知花の区長が酒と花米を神人にささげることから始まる。(写真①) 本来ノロがいて取納すべきものだが、ノロ不参加のためウッチヌアンシーが代行する。ノロのカーブヤーを置き、先程の三種の草木の葉を束ねたものをその前に置いている。知花区長に続き、松本の区長が同様のことをする。その後さらに知花、松本の順でウンサク (神酒) を神人にあげる。ノロ代行のウッチヌアンシーはノロのカーブヤーに竹の葉で2、3滴したたらし、おはつをあげる。ウムイシンカにもウンサクが配られる。2人のチデン打ちがウッチヌアンシー (本来はノロ) の前へ進み、チデンをささげる。ウッチヌアンシーはそれを受け取り、三回廻し、三回叩いて渡す。(写真②)

神サギ屋の中で正面向きに坐っていた神人はここで円く坐り、合掌してウムイをうたう。(写真③)



④ 知花トゥヌ全景 神サギ屋と手前はウムイシンカ (1967年)



⑤ 松本トゥヌの祠の前で
右はミッチュ・左は女神職 (1968年)

へーへーイー、へーへーイー

とのうちんちゆらさ (殿の内も美しい)

ましうちんちゆらさ (屋敷内も美しい)

神が道あきり (神の道を開けたまえ)

ヌルが道あきり (ノロの道を開けたまえ)

曲は前日の曲と同じである。5月も6月もこの一曲だけである。これがすんでウムイシンカのウムイがはじまる。その間神女は正面へ向いて合掌する。

(1) イーン イーン イーむーウーキーかー アーンしーキーン イーン キーン。

(2) イーン イーン イーン はーン アーン アーン アーン。

(3) アーン アーン アーンじー フィーン イーン イーン イーン イン
キーンイーンイーン。

(4) まーン アーン デーインりーン キーン ヒーン イーン

(5) イーン イーン てンイン らイこ ヲーン オーン ヲーン オンオン

(以下略)

これを済まして、女神職は神衣裳をふだん着に着替える。松本トゥヌへのぼり右にウムイシンカが坐り、左は女神職の座席である。女神職はふだん着のままである。松本からウンサクが出され、ウムイシンカのウムイだけがうたわれる。ここでオクデは各自の元家へ帰り、香炉を拜む。(ノロ)ウッチヌアンシー、ミッチュ、ウムイシンカ全員は登川、池原部落へ行く。昔は馬に乗ったと言われ、その後はかごに乗ったとも言われ、その際の馬やかごかきはこれらの部落から出したと言われる。

登川や池原のトゥヌでの儀礼は、酒、ウンサクを三種の草木の葉とノロのカーブヤーに捧げることにはじまるなど、先の知花、松本の行事とほぼ同じなのでここでは省略する。知花以外の部落にも古い家(門中の大元)があり、したがってクデもおり、それぞれのトゥヌへ出るならわしである。

5 終りに

まつりの経過は、大方現在行なわれている通りであるが、昔は朝神、夕神があり、知花トゥヌを朝行ない、登川、池原を済ませ、夕神に松本トゥヌであったがいつの頃か改正されたもようである。神道もヌンドンチの後方から登川へ通じた道があったが、自動車で神行列する現在では誰も通る者はいない。雨天の時は、ヌンドンチで行なう。登川、池原はウンサク等をここへ持参する。

知花のウムイシンカ(男声)による「ウムイ」は特異なものらしく、山内盛彬氏はこれを「南洋楽ではないか」と次のように述べておられる。^(註14)

- (1) 音階は現にニューギニヤ、高砂族に見られる三声音階。
- (2) 拍子は東洋民族楽にはあまり見られない三拍子。
- (3) ウムイは女性に定まっているが、これは男声である。
- (4) 詞は南洋語らしい（目下解釈研究中）。

これについてさらにある人は中国系の歌だろうといい、ある人は「イーン」は稲、「アーン」は粟、「マーン」は黍だろうと想像をたくましくする。謡う者も傍で聞く者も意味のわからぬままである。

ところが、世礼国男氏^(註15)によると、これは〈おもろさうし巻22—22〉「知念久高行幸之御時おもろ一首里御城打立之御時」のおもろであるという。前記歌詞カタカナ中ひら仮名の部分だけを読むと「むかしはじまり（や）てら（だ）こ………」となる。つまり、

むかし、はちまりや、てたこ、大ぬしや きよらや、てり、よわれ せのみ、
はちまりや（巻22—22）

ということになる。したがってこれは南洋語でも中国語でもなかったわけである。以上のことを付記して稿を閉じる。

- 註1 屋号をオホンダカリ（大村渠、シマチクドンともいう）、シマブク（島袋）、チハナク（津波古）、中大屋、東ナーカントー、メンナーカ。
- 註2 1つの香炉に1人のクディングッのばあいもある。
- 註3 沖縄語辞典550頁「ukudi」の項。
- 註4 神人になる際の一類の精神倒錯の状態。そういう人は「サーダカ生まれ」、つまり霊力高く生まれているという。
- 註5 比嘉政夫氏「村落の祭祀組織と〈ハラ〉の祭祀組織—沖縄南部における事例から—」（日本民俗学会報39）。
- 註6 部落の共同的な墓、つまり地縁による寄合墓。
- 註7 いにしえの祖先が使用した恵みの井戸。若水や産水を取る。
- 註8 「神と村」（139頁）。
- 註9 霊魂が残らないように祭ること。
- 註10 神（祖先神）の祭祀場。
- 註11 神アシャゲを意味する語であろう。
- 註12 ノロの道案内役という説とニッチュ……つまり根人の転訛だとの二説がある。
- 註13 ウムイを謡う人で、男性だけである。「美里村史」には任期2年とある。しかし現在では必ずしも一定していない。
- 註14 「知花ウムイに南洋楽」（1967年9月沖縄タイムス所載）
- 註15 「久米島おもろに就いて」（『南島』第2輯 昭和17年）

八重山小浜島泊遺跡採集石器について

玉 城 盛 勝

1. はじめに

八重山石垣市までは沖縄本島那覇から空路約90分海路18時間である。八重山群島には古風な戦前の沖縄が風光明美な海岸線や民家の赤瓦のたたずまいにその面影をとどめている。

八重山の中心地石垣市の西方12kmの洋上に小浜島がある。小浜島は周囲137.45km面積1033km²の小島で西表島に最も近い位置にある。人口は約800人で行政上は竹富町字小浜となり、内村と細崎の二つの集落がある。島の人々の島外との連絡には毎日石垣市との間に定期便船があり、唯一の貨物運搬船でもある。

内村は従来から住んでいる人々で農業を主として営み、八重山地方の豊年祭の赤マタ、黒マタの行事が行われる。細崎は宮古や他の地から移住してきた人たちが漁業を生業としている。鯉漁の時期には生餌の雑魚場が近くにあるのでにぎわうとのことである。

島の人々の生活用品や食糧品はすべて石垣市から購入している。農業による換金作物は砂糖キビで島内に小型製糖工場をもっている。

漁業を営む人々は、島内で消費できない漁獲物は石垣市で売りに出している。

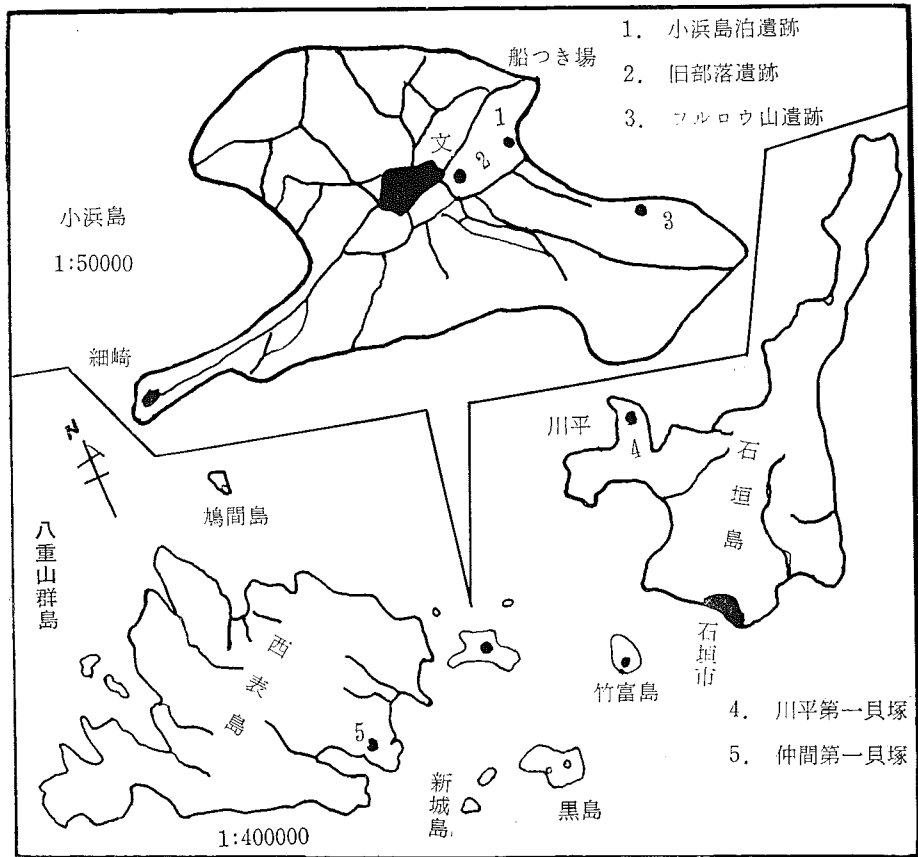
2. 八重山の考古学調査

八重山地方の考古学的調査は古く明治44年東京帝国大学の鳥居龍蔵博士によって川平貝塚の調査が行われた(註1)がその後長い空白状態が続いていた。第二次大戦後、1949年ごろから琉球文化財保護委員会多和田真淳調査官らの活躍により遺跡の発見が相継ぎ、その数は現在70余におよんでいる。(註2)発掘調査が行われた八重山地方の遺跡は「下田原貝塚」(註3)「中森貝塚」(註4)早稲田大学の八重山調査団による仲間、川平、山原等(註5)があり、その他マレツキー、金子エリカ、リチード・ピアソン、ジョージ・H・ケアの各氏の調査がある。

八重山地方の遺跡は、多和田氏によると「石器の形態から農耕時代の貝塚で支那陶器、磁器、沖縄陶器が混在せず。琉球縄文系の貝塚より新しく、川平系外耳土器貝塚よりは古い」下田原系と、「石器をわずかに使用しているか、或はほとんど使用してなく、支那陶器、磁器を盛んにともない、時に祝部式土器が出土する」川平系とに大別されるとし、また、その編年を前者は縄文文化後期下半期(面縄第一)とし、後者を晩期に位置づけしている。(註6)

早稲田大学の滝口宏教授は、四期に分け

第1期 石器が主で全く土器がみられない。



第2期 土器を少量ともない貝器、骨角器がみられる。

第3期 外耳土器が多量に出土し、磁器、鉄製品がともなう。

第4期 土器（ハナレ系？）磁器、鉄製品の出土がみられる。

と編年している。（註7）

3. 遺跡の環境

小浜島は標高99mの大岳が最も高く、島の周囲は白砂の海岸線でめぐらされている。

大岳の頂上からみると島は東南部を口縁とする水壺状にみえ、内村は島の中央部にあって高い台地上に形成されている。しかし飲料水は豊富といわれる。

遺跡は、内村から船付き場に行く左側の小型製糖工場の西側に隣接したサツマイモ畑やキビ畑で貝殻、石片の散布しているところである。海岸線からわずか200mたらずの距離にあり、広い砂丘である。

一帯は灰色の砂地で標高10m内外である。現在は製糖工場の前に道幅の広い道路ができ村の主要路として利用されている。また海岸には砂を掘ると飲料に適する淡水が湧き出るところがあると云う。

貝殻や石片の散布の状況からみて遺跡の広さは約800m² におよぶと推測される。表面採集による遺物と思われるものは貝類と石器及び少量の骨片で土器は全く採集出来なかった。

また、貝類はサラサバテイ、ヤコウガイ、チウセンサザエ、シヤコ貝等で特にサラサバテイが目立った。

貝殻や骨片には人為加工の認められるものはなく石類にのみ存していた。

4. 石 器

図 1 棒状の石器で全面打製のものである。

全体的に粗面で荒仕上げの感じをうけ、握りやすくするためか片面上部に大きな剝離がある。

また、先端（打部）には使用中の破損痕と思われる部分が認められる。

図 2 自然石を打ち欠き刃部をつけただけの粗製の石器である。自然にできた割りになめらかな面をもつ外側に対して、内側は剝離面を打ち欠いて整形している。刃部は鋭利なもので、使用中に刃の中央部で固い小形の物に打ちつけたときに生じたと思われる剝離痕がある。他の先端部はそれほど鋭くはないが製作中の痕か、使用による欠損かは不明だが破損痕がある。

図 3 全体的に精細な研磨がほどこされていて断面はきれいな三角面を形成している。稜を形づくっている二面はやや自然作用によってなめらかにされた感じもするが他は刃部をつくるために人為的に研ぎ出されている。刃部には使用中の欠損が稜側に向ってみられ、また、上部の切断面は製作当時のものか、後に折断したのか不明である。

図 4 菱形にちかい有稜石器の変形である。断面は刃部から中央部までには三角状をなし、それより上部は背面が二稜をつくっている。

稜面は簡単な磨きがされ、内側からの研磨部とで鑿状の刃部をつくっている。刃部には使用破痕がある。

図 5 有稜石器で頂部の稜を精微に研ぎ出し、下辺の研ぎ出しの弯曲の強い面とで鋭利な刃部をつくっている。全体的に整形され、断面は上辺のせまい台形状をしている。刃部から2cmの上部まではきれいに研いでいるが両縁辺は打製整形を軽く磨きあげている。

上部には内側に柄などが結びつけやすいようにするための打壊部がある。

図 6 小形の全面完全研磨のほどこされた石器である。両端に刃をもち、両面から研ぎよせた両刃の形態をしている。

刃先は両方とも内側に傾斜をつくり、側面から見ると「ねじれ」たようにな

っている。つまり使用時には両方の刃部が同一方向になり、両方が同一用途の道具としての役目をはたす。

図	写 真	少 法 mm			石 質
		最大長	最大幅	最大厚	
1	A	193	61	53	アルコース砂岩
2	B	190	69	33	閃緑岩
3	C	184	70	38	硅岩
4	D	131	47	35	輝緑岩
5	E	94	51	18	輝緑岩
6	F	94	30	14	緑泥干枚岩

八重山地方の石斧について滝口宏教授は、その刃部形態から4つに分類し

- 第一類 一方の刃部基点において角をつくり鉋やのみ状の刃形をなしているもの
 第二類 片刃ではあるが、刃部が円味を呈し、その基点において角をつくら
 ないもの。

第三類 一方の彎曲を強くし、他方の彎曲を弱くした型態のものである。

第四類 両刃のもので刃先が左右均整のとれたもの

としている。(註8)

本採集の図4は第二類に、図3、5、6は第三類に属するものと考える。

また、国分直一氏のadze型に属するものが、図3、4、5と考える。

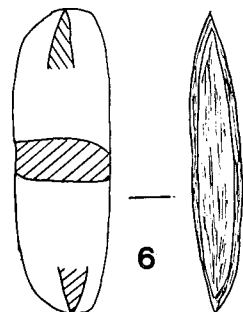
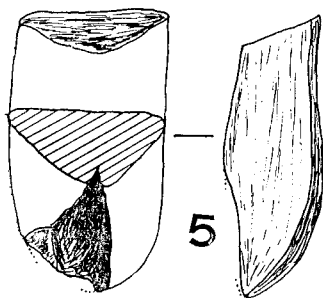
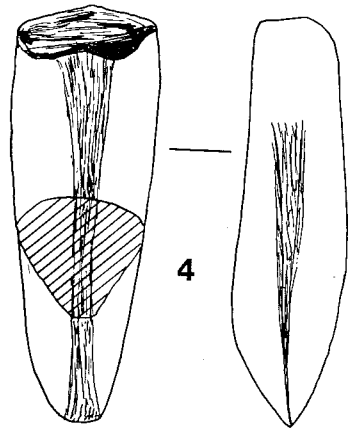
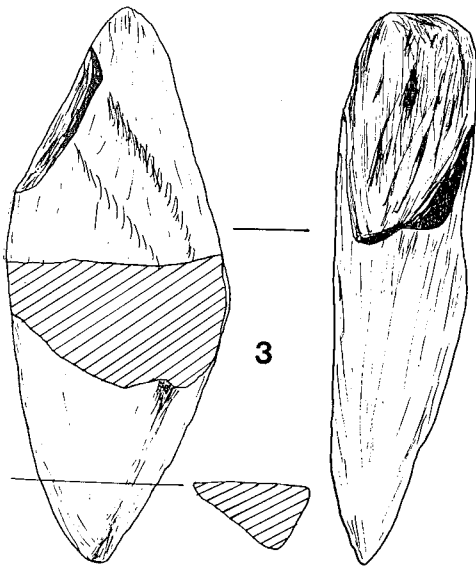
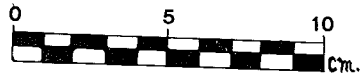
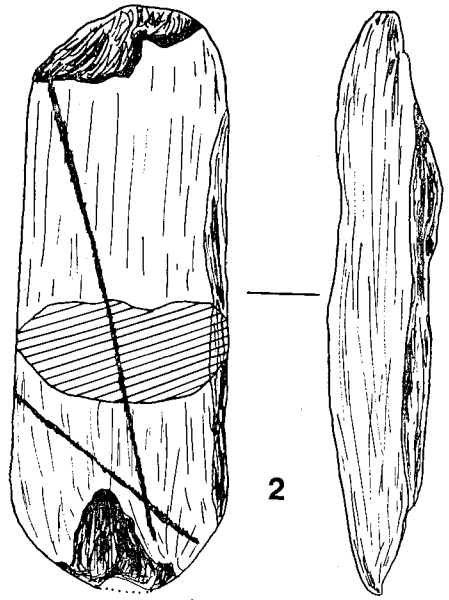
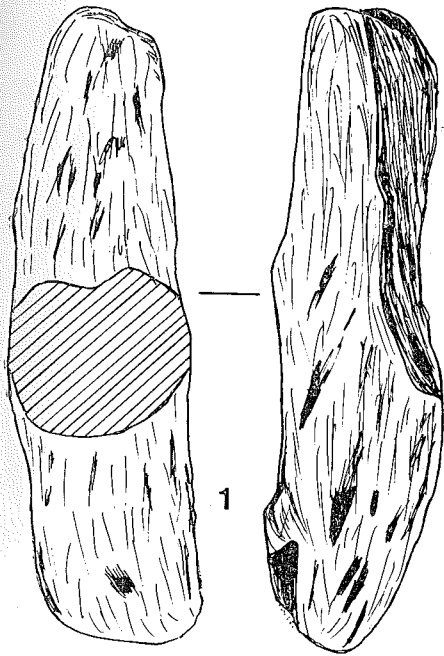
八重山地方の石器の用途については、生皮の搔取具として片刃石器が使用されたとするもの(註9)やhog-back型の石器は造船用の木工具とし、adze型に近い有稜石器を芋作との関係においている(註10)のものもある。

5. 結 び

本遺跡は西表島仲間第一貝塚や石垣島フサキ貝塚と同様、先島地方の土器を包含しない時期のものと思われる。

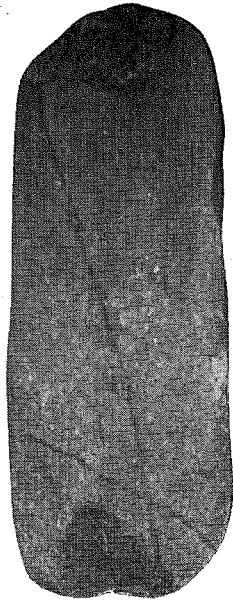
また、石器の状況から波照間島下田原貝塚出土の石器の範疇を出るものではない。

本稿の石器は表面採集によるもので、その包含状況、属序の有無、伴出遺物の量的調査などの研究、また文化については今後の調査に期待したい。





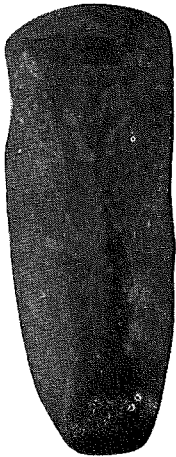
A



B



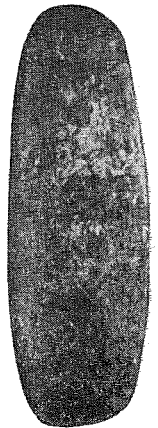
C



D



E



F

泊 遺 跡 出 土 石 器

おわりに

本石器類は1967年5月に八重山地方の考古資料調査の際に採集したものである。本稿を草するに遺跡や遺物等について琉球文化財保護委員会多和田真淳調査官から多くのご教示をいただいた。小浜島については当館職員黒島惇氏、また現地においては八重山図書館長石堂博一氏、字小浜の黒島健氏らの協力を得た。深く感謝の意を表します。

- 註1 鳥居龍蔵：「有史以前の日本」磯部甲陽堂1927
- 註2 文化財保護委員会・琉球文化財保護委員会監修「全国遺跡地図（沖縄）
国土地理協会、昭43.6
- 註3 金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文「琉球波照間島下田原貝塚
の発掘調査」水産大学校研究報告人文科学編9号1964年9月
- 註4 高宮広衛・C・W・ミーヤン「八重山鳩間島中森貝塚発掘概報」文化財
要覧 1959年版 1959年6月
- 註5 滝口宏編「沖縄八重山」校倉書房 昭35
- 註6 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」文化財要覧 1958年版
- 註7 }
註8 } 滝口宏編「沖縄八重山」校倉書房 昭35
註9 }
- 註10 国分直一「南島先史時代の技術と文化」東京教育大学文学部史学研究第
六十六号（昭和43）

(案 内)

名 称 : 琉球政府立博物館

所 在 地 : 沖縄那覇市首里大中町1の1

電 話 : 2 - 2 2 4 3

開 館 日

日 ・ 火 ・ 水 ・ 木 ・ 金 ・ 土

午前9時～午後5時

(但し、入館券の発売は午後4時半まで)

休 館 日

毎月曜日・公休日その他陳列替

等による臨時休館日

入 館 料

大 人.....10仙

学 生 (大学生) 5仙

児童生徒 (高校及び小中学生) 2仙

※ なお、20名以上の団体見学は2割引とする。

第 2 号

1969年 6 月 7 日 印刷

1969年 6 月 10 日 発行

編集発行 琉球政府立博物館

印刷 サ ン 印 刷 所